
魔法少女リリカルなのは ～Prologue～

COMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは（Prologue）

【Nコード】

N0788I

【作者名】

COMA

【あらすじ】

光と闇：それは対極な存在。決して交わらない双方が相容れてしまったのは、神様の気まぐれか、はたまた時の悪戯か。いや、違う。それはきつと偶然であり必然。まさに―――“運命”だったのだらう。

〈Episode 00：開幕〉（前書き）

このたびは当サイトへお越しいただき、誠にありがとうございます。さて、このサイトに記載されている小説をお読みいただく前に六つほどの注意点があります。

それを読んで嫌悪感を抱く方は、すぐに退室することをお勧めします。

<注意事項（必読）>

1. この小説はかなり中途半端な時期から始まり、オリキャラを中心にして話が進んでいきます。
2. 作者は今回が初の投稿ですので、駄文の羅列かも知れませんが、どうかご了承ください。
3. この作品はまだ未完成な部分が多いので、かなり年齢制限が曖昧です。
4. 上記の理由のため、グロテスクなシーンなど過激な場面が出てくるかもしれません。
5. この小説の盗作は固くお断りいたします。
6. この小説に関しての中傷も固くお断りいたします。

以上の注意点を読み、それでも構わないと言われる方は、どうぞ小説をお楽しみください。

追記・

えー私はこれでも一端の学生（高校生以下）のため、テストやら体育祭やら何やらに追われ、更新するのがかなり遅くなるかもしれませんが、長く、温かい目で見てやってください（汗）

〈Episode 00：開幕〉

あの日、少年はどこか危うくて、儚くて、しかし太陽のように強くきらめく、優しい光と出会った。

あの日、少女はどこまでも深く、昏い、だけど安心という温かさをくれる、冷たい闇と出会った。

本来ならば決して相容れることのない二つが出会ったのは神様の気まぐれか、はたまた時の悪戯か。

いや、違う。きっとそれは偶然であり必然。まさに——“運命”だったのだろう。

闇は光を導き、そして時に光は闇を癒す。

そんなお互いに支え合っているような二つの存在が織り成す道の先にあるのは——残酷な、悲しい現実。

真っ暗な闇が近づくにはその光はあまりにも眩しすぎて、真っ白な光が触れるにはその闇はあまりにも深すぎて…。

それは決して相容れてはならない双方が出会い、必要としてしまったがために起こってしまった、たった一つの悲劇だった。

だが、それは未来の話。彼らがその悲劇と対面するのはこれから更に遠く、しかし近い。

これはそんな悲劇の引き金となってしまう一番最初のお話…。
必然と運命に抗えず、逃れることもできない少年と少女の話は、今、ここからゆっくりと幕を開ける…。

〈Episode 01..動き出す歯車なの〉

「……これは、流石にやり過ぎなんじゃないか？」

そんな、呆れにも似た声音で抗議するのは、整えられた短い黒髪に藍色の瞳を持つ生真面目そうな顔付きの少年。手には無骨な杖型のストレージデバイスを持ち、身にまとっているのはローブ状の黒いバリアジャケット。

そして、彼の視線の先にいるのもまた、少年だった。

整えられた短い黒髪という点は同じだが、こちらの少年は寝癖なのか、はたまた癖毛なのか、若干の跳ねが見え、その下にある瞳は綺麗な琥珀色。

年は、まだ幼さの残る顔付きからして、彼よりも些か下に見えるのだが……

少年（琥珀）

「戦闘にやり過ぎも何もないってリーゼたちに習わなかった？」

そう言って怪しく口角を持ち上げて笑む様は、異様な雰囲気をもし出していた。

そんな彼の手には、対峙する少年と酷似した杖型のストレージデバイスが握られており、身にまとうのはロングコートを模した銀灰

色を基調とするバリアジャケットだ。

少年（藍色）

「これは“戦闘”じゃなくて、あくまで“模擬戦”だぞ？」

少年（琥珀）

「うん、それはもちろん分かってるよ？けど、例え模擬戦だろうと本気でやらなきゃ意味がないし」

その言葉に、体に纏わりついた幾重ものバインドによって身動きを封じられている藍色の瞳の少年が苦々しく顔を歪めた。

琥珀色の瞳の少年はそんな彼を少し距離を置いた場所から悠々と見上げている。

そんな、誰から見ても勝敗が明らかな現状を見て諦めたのか。

藍色の瞳の少年は深い、深い、溜め息を長めに吐き出して、

少年（藍色）

「まあ確かにお前の言う事も一理ある。さっさとケリを着けてくれ」

半ばやけくそ気味にそう吐き捨てたのだった。

少年（琥珀）

「了解♪」

そして、それを聞いた少年は小さく微笑む。と、同時に無骨な魔導杖の先端に集まり始める黒。

その色はただの無粋な黒ではない。光こそ発していないが、それはまるで黒真珠のような艶のある上品さを持った黒色。

まさに漆黒と言えるであろう輝きを放つその魔力はどんどん肥大していき、そして、それを見た藍色の瞳の少年が戦慄したように慌てて口を開く。

少年（藍色）

「ちょ、ちょっと待て！いくらなんでもそれはやり過ぎじゃないか！？」

少年（琥珀）

「ん？でも早めにケリを着けろって言ったよね？」

わざと分からないふりをして、意地悪い笑みを浮かべる琥珀色の瞳の少年。

それを見た藍色の少年の顔は一瞬にして凍りつき、慌てて漆黒のバインドから逃れようと脱出を図る。

が、その抵抗を嘲笑うかのように、拘束は外れる事はおろか緩む気配さえも見せなかった。

少年（琥珀）

「まあまあ。魔力ダメージのみのセーブ付だから死にはしないよ。つまりは————“問題ない”」

少年（藍色）

「あり過ぎだ！！」

その抗議を右から左に聞き流した琥珀色の瞳の少年は、こちらの準備が整った事を確認すると、無抵抗の標的へゆっくりと狙いを定めて、

少年（藍色）

「や、やめろおお……！！！！」

少年（琥珀）

「ファイア」

この場に響く悲痛な制止の叫びを無情にも無視して、凝縮された漆黒の魔力の塊を強力な砲撃として静かに撃ち放った…。

その後、砲撃をもろに喰らった少年はボロ雑巾にも似た状態で、しばらくの間床に突っ伏していたという……。

———この出来事から、一時間後……

一隻の船が、ゆっくりと世界と世界の狭間である“次元空間”を航行していた。

この船の名は『アースラ』。『時空管理局』と呼ばれる機関に所属するⅠ級艦船の内の一隻だ。

その艦内、ブリッジでは数名のスタッフが作業を行い、大型のメインモニターに二人の少女の姿を映し出していた。

片や、豊かな金髪をツインテールにした黒いバリアジャケットの魔導師。

片や、明るめの茶髪を気持ちツインテールにしたような白いバリアジャケットの魔導師。

そして、それを眺めているのは先程の模擬戦を行っていた二人の少年。

二人が現在着ている衣服はバリアジャケットではなく、所属組織からそれぞれ支給された、一階の大人も着ている制服だ。

二人の外見年齢は多く見積もっても十五歳以下。この年代の場合で見ると、少々……いや、かなり不釣り合いな格好に見えるかもしれない。

が、しかし、この二人はそれぞれ自分が身にまとう制服を見事に着こなしていた。

それは、二人がその見た目に反して、持ち合わせている雰囲気が大人数に見えるのが大きな要因だろう。

現にモニターを見つめる二人の表情は年相応の子供が見せるそれとは違い、真剣で、貫禄があった。

ちょうどその時、ブリッジと通路を繋ぐスライドドアが開く音が聞こえ、二人は反射的にそちらへ振り返った。

入ってきたのは妙齡の女性。

綺麗な長い碧髪をポニーテールでまとめているのが印象的なその女性は、ブリッジ全体が見渡せる位置にあるデスクの椅子へと腰掛けた。

女性

「皆、どう？ 今回の旅は順調そう？」

「はい、目標の次元世界には今からちょうど160ベクタ後に到着予定です」

彼女の問いに、モニター操作を担当していた若い男性がスタッフ全員を代表して答え、

「前回の小規模次元震以来、これと言って目立った動きはないようですが……、二組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

その後を別の男性スタッフが引き継いで答える。

返ってきたものに女性は納得した表情をしながら「そう」と一言。と、そこへ、

「失礼します。リンディ艦長、お茶を」

栗色の髪をショートボブにした陽気そうな印象のある年頃の少女が、女性……この船の艦長を務めている“リンディ・ハラオウン”にお茶を出す。

リンディ

「ありがとね、エイミィ」

そう言っリンディは少女……この船の情報処理などを担当とするオペレーター“エイミィ・リミエッタ”が淹れてくれたお茶をすすり、それから少々真剣な面持ちで口を開く。

リンディ

「そうねえ……。小規模とは言え、次元震の発生はちよつと厄介だものね。危なくなったらすぐに止めないといけないわ。その時は頼むわよ？ クロノ、サクラ」

リンディが大型モニターから視線を外して、ブリッジの中央へとそれを向ける。

彼女の視線の先にいるのは二人の少年。

一人は、黒髪に藍色の瞳を持つ生真面目そうな顔付きの少年——
——“クロノ・ハラオウン”。

もう一人は、同じく黒髪に琥珀色の瞳を持つ温厚そうな顔付きの少年——
——“サクラ・ハラオウン”。

クロノは執務官、サクラは管理局の所属としては囑託魔導師という立場だが、どちらもこの船に乗船している中で最高にして最大の戦力である。

サクラ

「問題ありません。自分達はそのためにここにいるんですから」

クロノ

「マズイと判断したらすぐに向かいますので、安心してください。艦長」

サクラとクロノの自信に満ちた答えを聞き、リンディが満足そうな表情を浮かべていると、

エイミィ

「頼もしい限りですね。とても模擬戦で弟に惨敗したとは思えない程の♪」

クロノ

「な！エイミィ！」

意地悪い笑みを浮かべたエイミィの言葉に、クロノは若干ながらも声を荒げて彼女を小さく睨み付ける。

そんな息子の様子を見たリンディも「あらあら」と微笑みながら、

リンディ

「“また”負けちゃったの？クロノ」

と、“また”という部分を妙に強調させて、息子の上に鋭い杭を深々と突き刺した。ちなみに、それを行使した当の本人はまったくの無自覚である。

話の中心である二人の少年はどちらも口を開かず、クロノはしかめっ面、サクラは苦笑い。

その二人の代わりと言った風に、彼らの模擬戦の様子を傍観していたエイミィが説明を始める。

エイミィ

「最初は五分五分って感じだったんですけどクロノくんがトラップに引っ掛かっちゃって……、そのままサクラくんの砲撃でドカン。だよね？」

同意を求めるように二人を見るエイミィだったが、どちらからも肯定の言葉は返ってこなかった。

リンディ

「これで178勝143敗の37引き分け、か……。そろそろ追いつかれてきたわね、クロノ」

エイミィ

「最近はサクラくんの勝率が高いですし…、逆転の日は近いかもしれないですね」

クロノ

「まだまだ弟に抜かれる気はないよ、エイミィ」

これには流石のクロノもむっとしたのか、少々きつめの口調で言い返す。

サクラ

「まだ抜く事はできないかもしれないけど…、近い内に追いつくつもりではいるよ。“兄さん”」

クロノ

「やれるものならやってみればいいさ。だが、僕だってそう易々と追いつかせはしないぞ？」

不敵な笑みを浮かべながら、お互いの顔を見合う二人の少年。その間には小さな火花が散っているように見えなくもない。

そんな“兄弟”の姿をリンディをエイミィは微笑ましく見ているのであった……。

———そして、同日の夕刻……

アースラのブリッジにある大型のメインモニターには、先程と同じく問題となっている二人の魔導師が映っていた。

だが、今映っているのは先程見ていた録画されたものではなく、リアルタイムでの映像だった。

スタッフA

「現場ではすでに二者による戦闘が開始されている模様です」

スタッフB

「中心となっているロストログアのクラスは＋A。動作不安定ですが、無差別攻撃の特性を見せています」

ブリッジでは作業を行うスタッフたちがコンソールに手を滑らせながら、事件が発生している現地の状況を簡潔に説明する。

今まで自室で待機していたサクラやクロノも、警報音と共にブリッジへ。現在は飛び交う情報を耳にしながら緊迫とした面持ちで現状を映しているモニターを見つめていた。

サクラ

（次元干渉型の禁忌物品か…、早めに回収しないとマズいな）

二人の魔導師と共にモニターに映っている、自我を持った巨大な木のお化けのようなそれを眺めながらサクラは思う。

それは、自分の隣に立っているクロノも同意見だったようで。
二人は一度だけアイコンタクトを取ると、艦長席に座るリンディへと振り向いた。

リンディはそれに応じるように真剣な顔で頷き、

リンディ

「クロノ・ハラオウン執務官とサクラ・ハラオウンの両名は出られる？」

ただ一度だけ、確認を取る。返ってくる答えは分かりきっているが、一応、だ。

案の定、少年二人からの返答は……

サクラ

「問題ありません」

クロノ

「命令があれば、いつでも」

いつもと同じものだった。

それを聞いたリンディも満足そうに頷き、そして二人の局員に命令を下す。

リンディ

「それじゃあ、二人は現地に飛んで戦闘行動の停止とロストログアの回収。あと、両名からの事情聴取を」

サク&クロ

「了解」

姿勢を正して敬礼を返した二人は、酷似したそれぞれのデバイスを起動させ、制服からバリアジャケットへと姿を変えた。

現在、二人の魔導師はどちらも巨大な木のお化けに専念しているようだが、それが終われば前回と同じように両者間での戦闘が勃発する可能性は非常に高い。

故に、二人は少し足早にブリッジに設置された転送ポートに乗り、それぞれ転移魔法を展開し始める。

そして、あと少しで転移魔法の構築が終わるところでリンディが艦長席から立ち上がり、二人の方を振り返ると、

リンディ

「気をつけてね」

どこからともなく現れた白いハンカチを手に、緊張感など欠片もない声でそう言ったのだった。

ちなみに、それを聞いた少年二人が軽くズッコケ、転移魔法の構築が霧散しそうになったのはまったくの余談である。

クロノ

「はい…、行って来ます……」

母のふざけた行動に呆れながらも実直に返事をするクロノと苦笑いを浮かべるサクラ。

そして、二人は足元に展開した魔法陣の発生する光に包まれ、その先へと姿を消した。

リンディ

「二人とも頑張ってね…」

二人が転移した後のポートを見つめながら、リンディはアースラの艦長の顔ではなく、一人の母親としての顔でそんな言葉を呟いたのであった……。

〈Episode 01..動き出す歯車なの〉(後書き)

えー本当にお久しぶりです。COMAです。

この度は何を思ってたか、今まで書き上げた小説を一気に消してしまいました…。

友人曰く「最近テストとかばっかだから精神的に追い詰められたからじゃん?」とか言われてしまう始末…。(汗)

おまけにオリキャラの名前や外見が変わってしまうという馬鹿げた出来事が発生。

前の名前が良かった、もしくは今まで楽しく読んだのに(万が一の話ですが)という方々、すみません(汗)
特にこの駄文小説をお気に入り登録してくださっている方々には、本当に申し訳ないと思っています。

やはり、携帯での小説とPCの小説の両立はこの忙しいご時勢には無謀なことだったと反省し、今後は使い慣れたPC一本でいきたいと思います。

というわけで、今日から気分一新。頑張っていきたいと思いたいますので、どうぞよろしくお願い致します。

それでは、見たかもしれませんが次回予告をどうぞ。

<サクラ>

再び起こるかもしれない次元震を未然に防ぐために、二人の魔導師

の戦闘を止めようと向かう僕たち。

<クロノ>

しかし、起こっていた事態は僕たちの予想よりも遥かに厄介で、面倒なことにまで発展していた。

<サクラ>

事件の概要を知るために現場にいた白い魔導師の女の子に事情聴取をしたことで、僕たちも動き始めた歯車の一つとなって事件に関わっていく。

<クロノ>

というか、あの台詞って僕たちも言わなくちゃいけないのか？

<サクラ>

え？でもあれはまだ出てないなのはの代名詞とも言える台詞だし…ダメなんじゃない？

<なのは>

だーめ！ちゃんと二人とも言わないとダメなの！！

<クロノ>

なっ、なのは！？いつの間に！！

<サクラ>

なのはの出番は次の話からだよ！？

<なのは>

二人がちゃんと言わないかもしれないからってCOMAさんに頼まれて見に来たの。

<クロノ>

くっ、COMAめ…余計なことを…。

<サクラ>

ていうか、男の僕らが言うのめっちゃ恥ずかしいんだけど…。

<なの>

いいからっ！ほら早く言わないと次回予告が長くなっちゃうよ！！

<クロノ>

だが…

<サクラ>

諦めよう、クロノ。これも運命だよ…（溜め息

<クロノ>

……………そうだな。

<なの>

それじゃあ、はい！どうぞ！

<サク&クロ>

次回、魔法少女リリカルなのは（Prologue）

『Episode 02…対峙する少女なの？』

リリカルマジカル、頑張ります…。

<なの>

はい！よく出来ました♪

<サクラ>

これ、絶対ドン引きだよね…。

<クロノ>

言うな、悲しくなってくるから…。

〈Episode 02…対峙する少女なの〉

夕刻。水平線の先に沈もうとしているオレンジ色の太陽が、その下にある海を同色に染め上げている。

そんな海に隣接するようにしてある一つの臨海公園の上空に、小さな菱形の青い宝石が浮かんでいた。

そして、それを中心にして対峙するのは二人の少女。

どちらもまだ幼い顔付きをしているが、二人が発している雰囲気は極普通の子供が出すような無邪気なそれではない。

張り詰めた空気は、閉鎖されている静かなこの空間を満たし、互いの顔は真剣そのもの。

（あの子に……フェイトちゃんに聞かなくちゃ……。〈ジュエルシード〉を集める理由を…）

自分に対峙する、黒いバリアジャケットに身を包んだ少女の澄んだ赤い瞳を見つめながら、彼女と対照的な白いバリアジャケットを身にまとう少女……。 “高町なのは”はそう思った。

〈ジュエルシード〉とは、なのはが魔法と出会うきっかけとなった“ロストログア”と呼ばれる物の一つ。

つい最近まで極々普通で平凡かつ平和な生活を送ってきた彼女は、魔法にジュエルシードといった未知なるものとの出会いに酷く戸惑

いを感じていた。

だが、彼女は決意した。

自分の住んでいるこの街が危険にさらされないように。

大好きで、大切な家族や友人たちを守るために。

自らの戸惑いを断ち切って正面から向き合い、立ち向かうことを。

——誰かを守り、助ける。その力が自分にあるのならば、自分がやらねばならない。

そんな思いを抱きながら、彼女はただ前だけを見ていた。

そんな矢先に出会ったのが、今、目の前にいる彼女……“フェイト・テストロッサ”と名乗る少女。

出会った当初はすごく冷たい感じのする子だと思っていた。

あまり表情を変えないし、口数も少ないからそう思うのは当たり前だろう。

が、幾たびも出会い、お互いの杖を交える事でなのははその瞳に宿る優しさに気付いたのだ。

そして、それと同時に、その奥底に隠された深い深い悲しみがあることも…。

その理由を知りたい、と彼女は思っていた。

何故そんな事を思うのかは自分でも分からない。

ただ、知りたい。それだけだった。どうして、そんなにも悲しい瞳をしているのか。その理由を。

だからこそ、彼女は……

なのは

「私が勝ったら……私がただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら……お話、聞いてくれる？」

フェイトと戦い、そして打ち勝つ事でその理由を知ろうとしていた……。

対するフェイトは向けられたその問いに答えずに、ただじっと自分に言葉をかけてくる少女の姿を見据えていた。

交差する澄んだ赤い瞳を優しいアッシュグレイの瞳。
そんな二人の様子を地上で見つめている一頭の赤い狼。

流れる沈黙。

そして、交わっていた二つの双眸に同じ光が宿った事を皮切りに、二人の少女はほぼ同時に宙を蹴る。

互いに見据えるその瞳に映るのは———それぞれの、“決意”。
負けないという、“意志”。

空中を翔ける白と黒。

この短期間で数え切れない程ぶつかり合ってきた杖が、今、再び激突しようとしたまさにその瞬間、

「ストップだ！」

乱入者は突如として現れる。

〈Episode 02…対峙する少女なの〉（後書き）

はい、というわけで無印編の二話目を無事更新しました。COMAです。

話の流れにあまり変化がないというか…文章はあまり変わらないじゃないかと思う方が多いかもしれませんが、オリキャラであるサクラの性格や生い立ちといった部分がちゃんと変わりますのでご安心下さい。

この調子であまり間を空けずに頑張って更新していきたいと思えますので、感想等がありましたらよろしくお願いします。

では、あとがきもこの辺にして次回予告をどうぞ。

〈なのは〉

私とフェイトちゃん以外に現れた新しい二人の魔法使い。この人たちって一体…！？

残された〈ジュエルシード〉と私たちはどうなってしまうのか。

次回、魔法少女リリカルなのは〈Prologue〉

『Episode 03…突然の乱入者なの！？』

リリカルマジカル、頑張ります！

〈Episode 03…突然の乱入者なの!?〉

「ストップだ！」

目に突き刺さるような眩い光が両者の間を遮るようにして発生し、それと同時に聞こえたのは少年の声。

そして、ぶつかり合おうとしていた双方の杖はその少年の手によって止められていた。

少年

「ここでの戦闘は危険すぎる」

いきなりの乱入者になのはもフェイトも反応できず、少年の言葉に上手く対応できない二人。

まあ全くの見ず知らずの少年が、何の前触れもなく割って入ってきたのだから致し方ない訳だが。

そんな二人に構う様子など見せず、少年はなのはの杖を左手で、フェイトの杖を自身の無骨な杖で、それぞれ受け止めた状態のまま言葉を続ける。

少年

「時空管理局執務官、“クロノ・ハラオウン”だ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

時が止まったかのように、周辺が一気に静まり返る。

クロノ

「まずは二人とも武器を退くんだ」

“クロノ・ハラオウン”と名乗った少年の介入により、空中で一
時停止状態だったなのはとフェイトはその言葉に素直に従い、クロ
ノも含めた三人は地上へと降り立つ。

クロノ

「このまま戦闘を続けるなら——っ！」

言葉が続けようとしたクロノに向けられた、オレンジ色の魔力弾。

その存在に即座に気付いたクロノは水色のシールドを斜めに展開
してそれらを受け流したあと、素早く放たれた方向へと視線を投げ
る。

そこには……

「フェイト、撤退するよっ！離れて!!」

いつの間に空に上がったのか。前方に再びオレンジ色の魔力弾を生成する、フェイトの使い魔である赤い狼……“アルフ”の姿があった。

それを聞き、素早く空に上がったフェイトを合図にして放たれる四つの魔力弾。

直射型のそれらをなのはとクロノはそれぞれ後方に飛ぶ事で回避し、その場からある程度の距離を取って地に降りる。

標的を失った魔力弾はその先にある地面へと着弾。大規模な爆発を起こし、灰煙と抉れたコンクリートの欠片を爆風によって舞い上げた。

そして、この状況を好機と捉えたのか。

フェイトは空中に滞空している菱形の青い宝石、＜ジュエルシード＞を確保しようと手を伸ばすが……

「させないよ」

彼女の行く手を遮るようにして、もう一人の少年が現れる。

その存在を視認したフェイトは伸ばしかけた手を引き、恐るべき速さで動作を攻撃へと変更。

目前に現れた少年を自身のインテリジェントデバイス『バルディッシュ』で叩き潰そうとする。

が、少年もまた自分の持つデバイスでそれを受け止める。

少年

「自己紹介が遅れたね。時空管理局嘱託魔導師、“サクラ・ハラオウン”だ」

フェイト

「貴方の事なんて聞いてない。そこをどいて…」

少年の親切な自己紹介を冷たく切り払い、自分の用件だけを述べるフェイト。

そんな彼女の姿を見て、“サクラ・ハラオウン”と名乗った少年は小さな嘆息を吐き出す。

サクラ

「僕としては出来れば平和的な方面に話を持っていきたいんだけど……」

そこで一度言葉を切ったサクラはちらりとクロノの方を一瞥し、そして再びフェイトに視線を戻して、

サクラ

「ごめん、これも仕事なんだ」

心底すまなさそうな顔をして謝罪の言葉を述べた、次の瞬間。

フェイト

「う、あああああっ!!」

デバイスを伝わって彼女の高速で駆け巡る黒い稲妻。

それをまともに受けたフェイトは高圧電流の衝撃で弾き飛ばされ、痺れて動かない彼女の体は、そのまま力なく地上へと落下していく。

アルフ

「フェイトおっ！」

なのは

「フェイトちゃん！」

アルフが悲痛な叫びを上げながらもフェイトが落ちてくる場所へと先回りし、大事な主人の華奢な体躯をその背で上手く受け止める。

その様子を見たのはも彼女が地面に叩き付けられずに済んで、ほっと胸を撫で下ろす。

が、それも束の間の安堵だった。

何故なら、彼女の視界の端に体勢を立て直したクロノがデバイスの矛先を二人に向けている姿が映ったからだ。

なのは

「ダメえっ！」

慌ててその間に割って入り、両手を大きく広げて背後にいるであろう二人を庇う。

それが予想外だったのか、驚いた表情をするクロノ。

空中でその様子を見ていたサクラもなのはの行動に驚いているようだった。

彼らが驚くのも無理はない。

なんせ彼女が庇ったのは、たった今の今まで戦闘を行った相手。いわば………“敵”なのだから。

なのは

「やめて！撃たないで！！」

そんな少年二人の驚きを他所に、なのはは必死にフェイトたちを庇おうとする。

そして、それをこの場からの離脱のチャンスと見たアルフは、

アルフ

「逃げるよフェイト。しっかりつかまって!」

自分の背にもたれてぐったりとしているフェイトに念を押し、その場から大きく跳躍して飛び去った。

サクラ

「……………」

その様子黙って見送っていたサクラの肩に一羽のツバメが止まる。

サクラはそのツバメに視線を向けず、ただ一言、

サクラ

「…“ラピス”。彼女たちの追尾と監視、頼むよ」

ツバメはまるでサクラの言葉に応えるかのように小さく一度だけ鳴くと、その紺碧の翼を大きく広げて飛び立ち、去って行った彼女たちの後を追うように飛翔していったのだった……。

——その頃、アースラのブリッジでは……

「戦闘行動は停止。搜索者の一方は逃走」

「追跡は？」

ブリッジのメインモニターに映る現地の状況を見つめながら、リンディは作業をしているスタッフにそう訊ねるが、

スタッフA

「多重転移で逃走しています。追いつけませんね……」

生憎と満足の得られる答えは返ってこなかった。

リンディは「そう……」と残念そうに呟き、引き続き作業を続けるように命じてから溜め息と共に腰を下ろす。

メインモニターにはちょうど、回収予定だった菱形の青い宝石を手にも、地上へと降り立つサクラの姿が映っていた。

リンディ

「まあ、戦闘行動は迅速に停止。問題のロストログアの確保も終了した事だし、今回はこれで良しとしましょう」

言葉の最後に「事情も色々聞けそうだしね」と内心で付け加えて、リンディはこの事件の重要な情報源となるであろう少女の姿を静かに見つめるのであった……。

——そして、一方の現地では……

サクラとクロノの目の前に現れる魔法陣を活用したモニター。そこに映っているのはアースラの艦長であり、自分たちの母親でもあるリンディだった。

連絡してきたリンディは開口一番に二人の労を労ったが、クロノの表情は少し曇っていた。

クロノ

「すみません、片方は逃がしてしまいました…」

悔しそうな口調でそう言うクロノは、どうやら対象の一方を取り逃がした事を悔やんでいるようだった。

そんな生真面目な彼の姿に、サクラもリンディも苦笑いをしつつ、フォローをする。

サクラ

「まあまあ。戦闘行動の停止とロストログアの回収は無事に終了したんだから良しとしようよ」

リンディ

「サクラの言う通りよ。今回も無事任務完了、私はそれで充分」

二人から続けざまに言われる励ましの言葉にクロノは自嘲気味の苦笑いを浮かべざるを得なかった。

だが、気分は先よりも幾分か晴れているのがその表情からはしっかりと窺えた。

リンディ

「それでね、ちょーっとその子たちに話を聞かなくちゃいけないから二人をアースラまで案内してあげてくれる？」

サクラ

「了解」

クロノ

「すぐそちらに戻ります」

二人の返事の後、「それじゃあ待ってるからね」という陽気な声音をその場に残してその通信は途切れた。

ちなみに、それに対してサクラとクロノが再び苦笑を浮かべていたのはほんの余談である。

そして、今まで後ろにいた白いバリアジャケットの少女へと視線を向ける二人。

彼らの視線の先にいる少女は状況についていけないのか、キョトンとした顔でこちらを見ていた。

彼女の肩に乗っているフェレットも似たような表情をしているため、それがまた可笑的い。

クロノ

「すまないな、少し僕たちに付き合ってくれ」

そんな彼女らに構わずにクロノは話を先に進めようとするが、大した説明もなしにそんな事を言われても向こうからすれば更に混乱するわけで。

現に少女は困惑の表情をありありと浮かべている。

しかし、クロノはそれに気付かず、アースラに帰還しようと転移魔法の準備を始めた。

サクラ

「ちょっと待ってよクロノ。それじゃあ話が全く見えないじゃないか」

見るに見かねたサクラが浅い溜め息を吐き出して口下手な兄にス

トップをかけ、それから白いバリアジャケットの少女に視線を向ける。

サクラ

「君たちには今回の出来事について少し聞きたい事があるんだ。だから、悪いんだけど今から僕たちと一緒に来てくれる？」

少女

「あ、えっと、はい…」

少女はオドオドとした様子を見せながらも頷いた。

サクラ

「そっちのフェレットくんもいいかな？」

フェレット

「はい、大丈夫です」

少女の肩に乗るフェレットの承諾も受け、それからサクラは転移魔法の準備をしていたクロノへと視線を向ける。

どうやら準備はすでに完了したらしく、早くしろと言わんばかりの顔でこちらを見ているクロノに苦笑を漏らしながら、再度、少女の方に向き直った。

サクラ

「それじゃあ、こっちへ」

少女を先導するようにして、サクラは地面に展開された水色の魔法陣の上に乗る。

その後に少女がおっかなびっくりな様子で乗り、そして最後に術者であるクロノが乗ると、三人と一匹は魔法陣から発生する光に包まれて、虚空へと消えていったのだった……。

〈Episode 03…突然の乱入者なの！？〉（後書き）

はい、と言うわけで無印編の三話目を投稿しました。CAMAです。今年も暖冬だって言ってたのに、めちゃくちゃ寒くなってきたのは何でだ？と疑問を抱きつつ、こたつで丸くなっています。

この調子だと年末年始の郵便局バイトは正直言ってキツそうです…
（泣）

まあくだらない作者のあとがきはこの辺にして次回予告をどうぞ。

＜なのは＞

突然現れた少年魔導師、サクラちゃんとクロノくん。その二人に連れられて、私はまた一つ未知なる扉を開きます。

時空管理局とは一体何なのか、そして、傷を負ったフェイトちゃんは大丈夫なのかな。

次回、魔法少女リリカルなのはPrologue

『Episode 04…時空管理局なの？』

リリカルマジカル、頑張ります！

〈Episode 04：時空管理局なの？〉

——そこは、すごく異様な光景。

彼女、“高町なのは”がこの場に着一いて一番の感想がそれだった。彼女の中にある魔法とは、もっとメルヘンな感じを予想していたのだが、ここはその考えに見事に反していたのだ。

薄暗い照明と無機質な金属の壁に囲まれた空間。

“魔法”と言うよりは“科学”と言った方がしっくりとくる感じのこの場所は、まるで何かのSF映画にでも出てくるような宇宙艦船の内部のよう。

唯一の救いは自分たちの背後の壁と足元に描かれている巨大な魔法陣がある事だろうか。

それがあるおかげで、この場が“魔法”という存在に関わっている事をどうにか主張している。

その、ある意味壮大な光景に思わず呆けてしまいそうになる反面、なのはの心には一抹の不安があった。

それもそのはず。

彼女にとってここは全くの見知らぬ場所であり、それに対して不

安を抱かない方がおかしい。

事情を聞くだけ、とは言われているが、「この後自分はもうなってしまうのだろう」と考えると更に不安は募るものであり、故に彼女は自分の魔導杖を抱きしめるように持っているわけで。

先立って歩く二人の少年の後を恐る恐ると言った風に付いて行くのは。

「怖い？」

その様子に気付いたのか。前を歩いていた少年の一人がなのはに声をかけてきた。

現在進行形で前を歩くもう一人の少年の青みがかった黒髪とは違い、その少年の黒髪は本当に純粹な黒。

癖のついているそれを長すぎず、かつ短すぎもしないくらいに整えた下にある瞳は綺麗な琥珀色。

そんな少年を見つめながら、なのはは彼の問いにどう答えていいか分からずに言葉に詰まっていると……

少年

「まあ怖いよね。そっちのフェレットくんはともかく、君はこういう場所に来る事自体が始めてみたいだし」

こちらの表情と反応で答えを悟ったのか、少年は困ったような微笑を漏らしながらそう言う。

少年

「でもそんなに心配しなくても大丈夫だよ。君の安全は保障されるし、話を聞き終わったらちゃんと元の世界に帰すから」

いつの間にか自分の隣を歩いて微笑みながらそう言ってくれる少年の口調はとても穏やかで。

それになのはどこことなく安心を感じ、自然と表情を和らげていた。

なのは

「あの…、一つ質問してもいいですか？」

少年

「ん、いいよ」

遠慮がちにおずおずと聞くなのはに対して、少年は柔らかな微笑を浮かべながら快く承諾する。

なのは

「えっと、その……時空管理局……？って、何なんですか？」

なのはの質問の内容は彼にとって意外なものだったらしく、少し驚いた顔をする少年。

そんな少年にフォローを入れるように、なのはの肩に乗っているフェレット……自分が魔法と出会うきっかけとなった“ユーノ・スクライア”が口を挟む。

ユーノ

「すみません。彼女はその、魔導師なんです……自分の世界しか知らないもので……。他の世界の事はもちろん、管理局についても知らないんです」

少年

「そっか、確かにあの世界は管理外指定だから知らないのも無理ないか。ちなみに君は管理局の事を知っているみたいだけど……」

ユーノ

「あ、僕は彼女の世界とは違う世界の出身なので……」

少年

「なるほどね」

ユーノの説明を聞いて理解し、ある程度の納得を得た少年はすぐに視線をなのはへと移す。

少年

「えっと、君は、その……ごめん、名前なんだっけ？」

なのは

「あ、“なのは”です。“高町なのは”」

少年

「そっか。僕の名前は“サクラ・ハラオウン”。改めてよろしくね」

そう言って、少年……サクラは先程と同じ柔らかい微笑を浮かべた。

サクラ

「で、高町さんの質問だけど……まずはこの世界の成り立ちから説明するべきかな？」

なのは

「世界の、成り立ち？」

首を傾げて疑問符を浮かべるなのはに、サクラは「そう」と頷きながら言葉を続ける。

サクラ

「この世は一つだけの世界じゃなくて幾つもの世界で構成されているんだ。高町さんの住む世界だけじゃなくて、僕みたいな魔法を使う人たちが住んでいる世界はもちろん、生物がいない世界や人間以外の生物が支配する世界だってある」

言葉の最後に「まあそんな世界は極少数だけだね」と付け加え、サクラは苦笑をする。

一瞬なのはの脳裏に、人間以外の生物が支配する世界とはどんなものののだろうかという考えが過ったが、今は頭の片隅に置いておく事にした。

サクラ

「そのたくさんある世界を管理し、均衡を守る組織。それが時空管理局なんだけど………わかる？」

なのは

「えっと、その……」

サクラ

「ちょっと難しかったかな？」

なのは

「すみません……」

申し訳なさそうに謝るなのはに、サクラは苦笑しながら「知らないのだから謝罪する必要はない」と言う。

そして、サクラは少し考える素振りを見せた後に再びその口を開いた。

サクラ

「じゃあ、高町さんの世界には何か事件とかはある？」

なのは

「事件、ですか？」

サクラ

「うん。例えば、強盗事件や放火事件みたいな」

そういう類のものなら、家族が見ているニュースなどで知っている。

常日頃、その日に起こった事件などが報道されるそれをたまに目にするのはは、サクラの問い掛けに「ある」と答えた。

返答を受けたサクラは微笑みながら満足そうに頷き、言葉が続ける。

サクラ

「そういう事件は高町さんの住む世界の中だけで起こっている出来事なんだ。だけど、世界はたくさんある。高町さんのように他の世界の存在を知らない世界もあれば、その逆もまた然りってね。

そして、その中には極稀に自分の世界から飛び出して他の世界に干渉しようとする……平たく言えば、たくさんの人を巻き込んで大規模な事件を起こそうとする人がいるんだ。

そういう人を止めて、そこに住む人や環境、その世界の全体を守るために作られた組織が“時空管理局”。まあ世に言う“平和の守護者”みたいなものかな？」

なのは

「なんか正義のヒーローみたいですわね」

サクラ

「あはは、そこまでカッコいいものじゃないんだけどね。せいぜいお助けマンってところかな？」

その言葉と共に微笑をして大げさに肩を竦めるサクラの姿を見て、なのははくすくすと小さな笑いを漏らす。

いつの間にか、ここに到着した時のような不安はもうなのはの中にはなくなっていた。

そして、気付けば一行は一つのドアの前に差し掛かっていた。

そのドアをくぐってから、ふと、思い出したようにもう一人の少年……クロノがなのはの方へと振り返る。

クロノ

「いつまでもそのままだと窮屈だろう？ バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ」

クロノの言葉に「確かに」と同意をするサクラ。

二人の勧めになのはも素直に従って、今まで身にまとっていたバリアジャケットを解除。いつもの学校の制服姿へと戻る。

持っていた魔導杖は、赤く煌く小さな宝石となって彼女の手の中に納まった。

それを見届けてから、サクラはなのはの肩に乗るユーノにも声をかける。

サクラ

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃない？」

サクラの言葉に何の事かと首を傾げるなのは。

ユーノ

「あ、そう言えばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

続けられる返し言葉に更に首を傾げて不思議そうな顔をし、自分の肩から床へと降りたフェレットのユーノを見つめる。

しかし、彼はなのはからの疑念の視線に気付かず、そして……

なのは

「え」

淡い緑色に発光するミッドチルダ特有のサークル型魔法陣を展開

し、自分の体をその光で包み込んだ。

それを見たなのは顔が若干引きつったが、それはすぐさま別のものに変わる。

その表情は、あえて一言で表すのならば……空前絶後。

驚愕に歪んだ彼女の視線の先にいるのは……

「ふう…」

柔らかそうなブロンドの髪を少し長めに切り揃えた、若葉色の瞳を持つ……“人間”の姿となった“ユーノ・スクライア”その人だった。

ユーノ

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりに……って、なのは？どうしたの？」

ユーノの戸惑い気味の疑問の声に釣られて、サクラとクロノもなのはへと視線を向ける。

三人の少年の視線が向けられている当の本人はというと、ユーノを指差し、目を点にした状態で固まっていた。

彼女の表情を見て、同時に首を傾げようとする少年たちよりも先に……、

なのは

「ふえええええええええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー？！？」

という、なのはの全力全開の大絶叫が金属で出来た壁に反響して、アースラの全域に「キーン」という効果音と共に広がり、響き渡っていったのだった……。

〈Episode 04…時空管理局なの?〉(後書き)

はい、というわけで四話目を更新しました。comaです。

ようやく時空管理局が登場し、この後の展開はもうほとんど見えていますよね(まあ前作とほぼ同じだから見えるのは当然なんですけど…)

身分上学生である私めもそろそろ冬休みに突入。

これを期に宿題などそっちのけで更新していきたいと思います。

目指せ!無印編年内完結!!

とまあくだらないあとがきはここまでとして次回予告をどうぞ。

くなのは>

少しずつ時空管理局の事を知っていく私達。

ついに明かされるジュエルシードの正体と、そして、私個人的に衝

撃の事実が発覚…!

えっと、何かもう色々ありすぎてびっくりの連続です…。

次回、魔法少女リリカルなのは〈Prologue〉

『Episode 05…ジュエルシードの正体なの』

リリカルマジカル、頑張ります!

Episode 05: ジュエルシードの正体なの

「ふええええええー！ー！ー！ー！？！？！」

「――！ー！ー！ー！」

あまりの大声に耳を痛め、思わず顔をしかめさせてしまうサクラとクロノの両名。

「な、なのは？」

突然の彼女の大声に反応できず、キョトンとした顔で目をパチクリさせるユーノ。

しかし、そんな三人に構う事なく……いや、この場合は構う余裕がないと言った方が正しいのだが……なのははユーノを指差した状態で、ほんの僅かに後退り、

なのは

「ゆっ、ユーノくんて、ユーノくんて、あの、その、何?!」

もはや何を言ってるのか、言いたいのかさえも分からない言葉を

早口で捲くし立てる。

現在の彼女の頭の中がパニック状態に陥っているのは言うまでもない。

なのは

「え、だって、嘘?! ふえ~~~~~?!」

一人暴走する少女の姿を咄然と見ている少年たち。

サクラ

「あー……君たちの間で何か見解の相違でも……?」

その中で、逸早く正常な思考を取り戻して口を開いたのはサクラ。

それに何か思い当たる節があったのか、ユーノは少し焦ったような様子でなのはに問い掛ける。

ユーノ

「えっと、もしかしてなのはが僕と出会った時って僕はこの姿じゃ……」

なのは

「違う! 違う! さ、最初っからフェレットだったよ~~~~!」

首をぶんぶん横に振り、ユーノの言わんとした言葉を否定する
なのは。

彼女の過剰な反応も最もだ。

何故なら、これまぜずっとフレットだと思っていた存在が…
…実は人間の、それも“男の子”だったのだから。

知らなかったとは言えども、つまり自分は人様の、それも異性の
前で普通に着替え…とりあえず、かなりの醜態をさらしていた事
を自覚した彼女がこのような状態に陥るのは必至といえよう。

例えば若干九歳にしても、魔法の才があったとしても、それ以前に
なのはも立派な女の子というわけだ。

だが、それは部外者であるサクラとクロノにとっては実にどうで
もいい話で。

そこからしばし繰り広げられる口論を、呆れた様子で見ているの
だった。

そして、ようやくそれが収まりつつあるのを見計らってから、ク
ロノが動く。

クロノ

「君たちの事情はよく知らないが…艦長を待たせているので出来
れば早めに話を聞きたいんだが？」

なのは

「あ、はい…」

ユーノ

「すみません…」

クロノの注意にしょんぼりとして少し小さくなってしまふのはとユーノ。

サクラ

「まあとりあえずはこちらへどうぞ」

そんな二人を見て苦笑を浮かべつつ、クロノと共に再び先よりも少し狭くなった通路を歩き出す。

そして、到着した艦長室。

クロノ

「艦長、来てもらいました」

サクラ

（あまりこの部屋はお勧めできないんだけどな…）

そんな事を思いながら、開いたドアの向こうへと歩を進めるサクラ。それは、先に入っていたクロノも同じように思っている事だろう。

四人が入った部屋は“和”という言葉で統一され尽くしていた。棚にはいくつもの盆栽がずらっと並べられ、畳作りの床の上には赤布が敷かれている。

そして、何故かこの場にある鹿おどし。

この艦船の外形とは全く持って不釣り合いなその部屋に、お茶の道具一式と共に正座をして座っているのは妙齡の女性。

この部屋の主である艦長のリンディだった。

サク&クロ

「……………」

何度来てもこの部屋の風景には呆れさせる…。と、サクラとクロノは同時にそう思いながら喉まで出掛かった溜め息を飲み下す。

この艦長室。普段からもうそんなのだが、特に客人を招く場合はその人間の出身世界の文化に合わせた風景に変わるのだ。

それも妙な線で。

どこからそんな情報を集め、そして部屋物を瞬時に移動・配置しているのかは皆無だが、リンディ曰く「故郷の文化に合わせる事で相手をリラックスさせるのよ♪それに楽しいじゃない♪」という事らしい。

明らかに自分が楽しいからという理由が先行されている気がするが、そこはあえてツツコまないで欲しいところだ。

リンディ

「まあお二人とも、どうぞどうぞ、楽しんで」

そんな息子たちの心情など露知らず。リンディは笑顔を浮かべ、いつもと同じのほほんとした口調で客人を招き入れるのだった。

それぞれ対峙するようにして座る一同。なのはとユーノの向かいにはクロノとリンディが座っており、サクラは何やらお茶の準備をしている。

リンディ

「初めまして。私はこの船：『アースラ』の艦長を務めさせてもらっている“リンディ・ハラオウン”です」

なのは

「あ、えっと、“高町なのは”です」

ユーノ

「“ユーノ・スクライア”です」

軽い自己紹介をしている間にお茶の準備を終えたサクラが、さりげなく全員の前にお茶を出す。

ちなみになのはとユーノ、それにリンディはお茶菓子付だ。

そしてそれから話されるのは、先程なのはがサクラに訊ねた時空管理局についての概要と、なのはやユーノが何故このような事件に巻き込まれたかの経緯だった。

一通りの説明が終わり、ある程度の要領を得たリンディ・クロノ・サクラの三人。

ようは彼女たちの事情はこうだ。

彼……“ユーノ・スクライア”が今回の事件の中心となっているロストロギア<ジュエルシード>の発掘者で、それを輸送している際にトラブルが発生。

そのせいで輸送予定だった<ジュエルシード>は“とある世界”に拡散してしまった。

責任を感じたユーノは一人でそれを収集しようと決意し、その世界に赴くが、その途中で深手を負って倒れてしまう。

そんな彼を発見し、保護したのが、現地の住人である少女“高町なのは”。

そして、その後に色々あった上で比較的魔力値が高く、尚且つ<ジュエルシード>が散らばった中心となっている街の住人である彼女にユーノが協力を願った……もとい、なのはが協力を申し出た……と。

リンディ

「そうですか…、あのロストロギア…＜ジュエルシード＞を発掘したのは貴方だったんですね？」

ユーノ

「はい…。それで、僕が回収しようとする…」

視線を落とし、沈んだ表情でそう返すユーノ。リンディはそんな彼を見ながら「立派だ」と言うが、その隣に座るクロノは「無謀だ」とも言う。

確かに自分が原因となって引き起こしてしまった事態ならば立派な事なのかもしれない。しかし、今回起こったトラブルは偶然のものでありユーノのせいではないのだ。

仮にユーノのせいでトラブルが発生したのだとしても、ロストロギアを一人で相手にするのは無茶を通り越して無謀だ。

おまけに、いくら魔法の才があるとはいっても仮にも一般人、それも戦闘経験がまったくない少女を巻き込んでしまったのもあまり頂けるものではない。

決してユーノが悪いと言う訳ではないが、今回の件はクロノの言う事が正しいのは明白である。

なのは

「あの… “ロストロギア” って一体何なんですか？」

隣で落ち込んでしまっているユーノを心配しつつ、なのははリンディに訊ねる。

リンディ

「遺失世界の遺産……って言っても分からないわね。えっと……」

なのはの問いに困ったように眉を下げるリンディは、助けを求めるようにクロノの隣に正座をするサクラへと視線を向ける。

そのSOSの視線に苦笑いを浮かべながらも、それに応えてサクラはリンディの代わりに説明を始めた。

サクラ

「次元空間の中にはさつきも言ったように幾つもの世界がある。それぞれに生まれ、成長していく世界……だけど、その中には極稀に成長し過ぎる世界があるんだ。そこで生み出された技術や科学、それらは自分たちの世界が耐え切れる範囲を超える事で、世界そのものを壊してしまう……」

そうして消えていった世界の技術によって造られ、世界と共に滅びずに取り残されてしまった物品……それが“ロストロギア”。

簡単にまとめると“過去に消失してしまった世界の遺産”さ」

なるべく分かりやすいように言葉を選びながら説明するサクラの姿を見て、満足そうな表情をするリンディ。

そして、サクラの後を引き継ぐように続けてクロノが口を開く。

クロノ

「使用用途などは不明だが、使い方によっては次元空間さえも滅ぼす力を持つ危険な技術であり、それは然るべき手続きを行い、然るべき場所に保管されなければならない品物なんだ」

リンディ

「貴女たちが探している<ジュエルシード>は次元干渉型のエネルギー結晶体。

これはいくつかを集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を発生させ、最悪の場合は次元断層さえも引き起こす危険物」

サクラ

「“次元震” って言うのは、高町さんとあの黒衣の少女がぶつかり合った時に発生した振動と爆発……あれがそうだよ。ちなみに“次元断層” はそのスケールを更に十倍ほど大きくしたものかな」

それを聞いて、なのはは昨夜のフェイトとの戦闘を思い返す。

<ジュエルシード>を巡って二つのデバイスが交差し、発生した激しい光と強い振動。

そして、起こった大きな爆発。

その後の光景を思い出し、なのはの表情は自然と暗くなる。

静かな室内に鹿おどしの音がやけに大きく広がり、皆の耳奥に響いた……。

そんな中、クロノが重々しくも再び口を開く。

クロノ

「たった一つの＜ジュエルシード＞……全威力の何万分の一の発動でもあれだけの威力があるんだ。複数個が集まって動かした時の威力は計り知れない」

ユーノ

「聞いた事があります。旧暦の462年、次元断層が起こった時の事……」

クロノに相槌を打ちながら、ユーノがそう言う。

それを聞いて表情を暗くさせるリンディやクロノ、サクラの三人。

リンディ

「あのような悲劇を繰り返しちゃいけないわ……」

そう呟くように言ってから、リンディは傍にある丸いケースの中から角砂糖を一つすくい、それを当然のようにお茶へと投入。

そのお茶を美味しそうに一口すすってから、真剣な表情で対面する二人を見た。

リンディ

「これより、ロストログア：＜ジュエルシード＞の回収は、我々時空管理局が全権を持ちます」

クロノ

「君たちは今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

なのは

「でも、そんな…」

やはり、という表情で項垂れるユーノ。

一方のなのははその言葉に納得がいかず、控えめながらも抗議の声を上げる。が、

クロノ

「次元干渉に関わる事件だ。民間人が介入できるレベルじゃない」

クロノの事務的な口調によってきっぱりと一蹴された。

しかし、それでも納得できないなのはは先程よりも少し強めの口調でどうにか食い下がろうとする。

そんなやり取りを見て、サクラが苦笑気味に仲裁に入りにかかった。

サクラ

「まあまあ。そんな急に言われても整理がつかないだろうし…、とりあえずは彼女たちに少し時間を与えてはどうですか？艦長」

リンディ

「そうね。今夜一晩ゆっくり考えて、二人できちんと話し合って…
…、それから改めてお話をしましょう」

その言葉に、ユーノはもちろん、抗議をしていたのはも洪々ながらも頷く事しかできなかった。

そして、それからすぐ後にクロノが「元の世界に送ろう」と言い、
なのはとユーノは無言のまま海鳴市へと戻っていくのだった……。

〈Episode 05：ジュエルシードの正体なの〉（後書き）

はい、というわけで五話目をサクッと更新しました。COMAです。無印編年内完結を目指し、祝日を利用してさっさと書き終えました。いつもこうだったらいいんですけどねえ…（苦笑）

今日でA'sの再放送も終わっちゃいますが、STSの再放送はやらないのかなあと思う今日この頃。
個人的にはできればやって欲しいなあ…DVDを買うお金がないから……。

とまあくだらないあとがきはここまでにして次回予告をどうぞ。

<サクラ>

こんにちは、今回は高町さんが体調不良のため僕が次回予告を担当します。

歯車が次々と集まり、合わさって、急加速をしていく物語。

今回の事件に僕たち時空管理局はどう動いていくのか、そして、もう一人の搜索者である“黒衣の少女”の内に秘められた意思とは…
…？

次回、魔法少女リリカルなのは〈Prologue〉

『Episode 06…強く悲しい決意なの』

…リ、リリカルマジカル、頑張りますっ！

——その後……

<サクラ>

はあ、疲れた。ていうか、何で今回は僕だけなんだ…？

<なの>

サクラくん、お疲れ様♪

<サクラ>

た、高町さん！？あれ、体調不良だったんじゃ……

<なの>

にやはは、ちょっとリンディさんに頼まれてね。

<サクラ>

母さんに……？

<なの>

うん、前にサクラくんが次回予告をするところ見逃しちゃったから見たって。

<リンディ>

~~~~♪（ビデオカメラを持った状態でにこやかに手を振っている）

<サクラ>

母さ————ん！？そこで何やってるんですか——？！！（リンディに向かってダッシュ）

<リンディ>

これも息子の成長記録に追加ねっ♪(走って逃げる)

<なのは>

にゃ、にゃはは…(それを見て苦笑い)

<COMA>

とまあある意味いじられキャラの主人公でした(笑)

—完—

## 〈Episode 06：強く悲しい決意なの〉

「凄いや、どっちもAAAクラスの魔導師だよ！」

「ああ」

オペレータールームにある大型のメインモニターを見ながら驚嘆の声を上げるエイミィと、それに相槌を打つクロノ。その隣にはサクラの姿もある。

彼らが見ているのは本日行われた戦闘時の映像。

今日の軽い事情聴取で知り合った少女、“高町なのは”と彼女に敵対する黒衣の少女のものだ。

真剣な表情で画面を見つめる二人の少年に対して、エイミィは嬉々とした様子。その証拠に……

エイミィ

「こっちの白服の子はクロノくんの好みっぽい可愛い子だし♪」

などと楽しげに言っている。

それでも彼女の両手は休む事なくしっかりと作業を行っているのだから大したものだ、と、サクラが呆れに近い感心をしたのは余談である。

エイミィ

「魔力の平均値で見てもこの子で127万。黒服の子は143万。加えて最大発揮時はその三倍以上」と

交互に映る白服の少女と黒服の少女の見ながら、エイミィの説明に耳を傾ける二人。

初めから分かっていた事だが、改めて言われるとまだ十にも満たない少女がこれだけの魔力を持っている事に驚きを隠せない。

特に“黒衣の少女”の持つ強大かつ巨大な魔力と、外見に見合わない卓越した戦闘技術は、驚嘆以外の何物でもなかった。

エイミィ

「魔力値だけならサクラくんと同等。クロノくんなら軽々と上回っちゃってるね」

クロノ

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ」

エイミィの言葉が癪に障ったのか、クロノがすぐに仏頂面で言い返し、

サクラ

「クロノの言う通りだよ、エイミィ。ただ魔力値が高いだけじゃ勝てないって事は僕が身を持って知ってる」

サクラが決まりが悪そうな苦笑いを浮かべながら賛同する。

確かにサクラの魔力値の平均値が136万に対してクロノはその半分以上。最大発揮時かなりの差が付いており、それだけで見ればサクラはクロノよりも遥かに上だ。

それなのに模擬戦のデータを見るとクロノの方が勝率が高い。

その理由は持っている技能と経験の違いだった。

年齢の違いなどによる部分もあるだろうが、やはり本質的にはその二つなのだ。

ただ力が大きいだけの者と、力は劣ってはいるがそれを最大限に使いこなす者とが戦った場合、勝率が高いのは後者と言える。

そして、その事実をこの中で一番よく分かっているのが、今までクロノに負けてきたサクラだった。

サクラ

（昔はよくコテンパンにされてたからなあ…）

そんな事を考えながらサクラが苦笑しているとオペレーター



ムのドアの開閉音が聞こえ、反射的にそちらへ視線をやる。

サクラ

「あ、艦長」

入ってきたのはリンディだった。

その姿は普段から見慣れている仕事着ではなく私服だったので、サクラの声が少しばかり驚きの混ざったものになったのはほんの余談である。

リンディはサクラたちへと歩を進めながらも、何故か少し不満顔。

その事にサクラを含めた三人が内心で首を捻っていると、

リンディ

「サクラ、たまには“艦長”じゃなくて“母さん”って呼んでくれないじゃない。クロノでさえ呼ぶんだから」

あっさりとその疑問は崩壊した。

どうやらリンディはサクラが何気なく言った言葉が気に入らなかったらしい。

サクラ

「え、でも今は勤務中ですし…」

リンディ

「いいの。艦長命令よ」

サクラ

「ええっ!？」

職権乱用もいいところ。強引なリンディの言葉によって後がなくなってしまったサクラは助けを求めるように周囲へ視線をやる。が……

クロ&amp;mp;エイ

「「……………」」

エイミイは苦笑いをしながら、クロノは関わりたくもないと言わんばかりに目をそらす。

頼みの綱を断たれたサクラが再び視線を前に戻すと、そこには期待に満ちた瞳でこちらを見つめているリンディの姿が。

そんな状況を見て、もはや逃げられない事を悟ったサクラは観念したように小さな溜め息を一つ吐き出して、

サクラ

「母さん」

困ったような微苦笑を浮かべながら、そう言った。

リンディ

「はい、よく出来ました♪」

サクラ

「わっ！ちょ、ちょっと母さん！？」

そんなサクラに喜色満面の笑みを浮かべたリンディは、サクラを自身の腕の中にすっぽりと納めて、その頭をこれでもかと撫でまくる。

そして、突然の母からの抱擁を受けたサクラはと言うと、流石に恥ずかしいのか顔を真っ赤に染めていた。

サクラ

「ちょ、母さん、苦し…」

なかなか解放してくれないリンディに、流石のサクラも少しばかりの抵抗を試みようとしたが……

リンディ

「~~~~♪」

いつになくご機嫌な母の姿を見て、抵抗することができなくなっ  
てしまい、最終的には諦めるのだった。

そんな自分への呆れの意味も含めて浅い溜め息を吐き出したサク  
ラは、ふと、思いついた疑問を口にする。

サクラ

「大体、何でいつも僕なんですか？クロノだって普段は“艦長”っ  
て呼んでるのに…」

不公平だ、と言わんばかりに不機嫌そうな声で言うサクラ。

その疑問にリンディは口元に指を当てながら「んーそうね」と  
考える素振りを見せて考え込む事およそ数秒。

リンディ

「まず体が小さいし」

オペレータールームにグサツという何かが突き刺さる鈍い音が響  
いた気がした。

リンディ

「女の子みたいに可愛いし」

今度は二度、オペレータールームに先と同じような、しかしそれでいて先よりも深く突き刺さるイメージの音が響いた気がした。

その音の発生源は……

サクラ

「——…つまり、僕は小さくて可愛い女の子みたいだから、と？」

リンディ

「そういうこと♪」

リンディの腕の中……つまりサクラからだった。

ちなみに最後の効果音はザクツという何かがバツサリと切り捨てられたような音だったそう。

完全に負のオーラを漂わせているサクラの姿にエイミィは苦笑いしかできず、クロノに至っては一種の哀れみの視線を向けていた。

リンディ

「それで、これが二人のデータね」

そんな微妙な雰囲気漂っている事など露知らず。サクラを腕の中に納めたまま、リンディはメインモニターを見上げる。

その言葉に釣られて、残る三人も今まで見ていたモニターに視線を戻した。

モニターに映る二人の少女はそれぞれの魔法を相手に向かって放ちながら、外見に釣り合わない高レベルな戦闘を行っていた。

リンディ

「確かに……凄い子たちね」

ポツリとそんな言葉がリンディの口から漏れた。

その腕に僅かばかりの力がこもったのを感じ取り、サクラは何気なくリンディの顔を窺う。

モニターに向ける彼女の瞳からはいつもの穏やかなのほほんとした雰囲気が消え、険しいものになっていた。

クロノ

「これだけの魔力をロストログアに注ぎ込まれれば次元震が起きるのも頷ける」

リンディと同じく表情を険しくさせるクロノの言葉に、全員が頷いた。

リンディ

「あの子たち、なのはさんとユーノくんが＜ジュエルシード＞を集めている理由は分かったけれど……」

モニターに映っている映像が白服の少女から黒服の少女に移り変わる。

リンディ

「こっちの黒服の子はどうして＜ジュエルシード＞を集めているのかしらね……」

皆の視線を集めている“黒衣の少女”は、モニターの向こうで淡い金髪をなびかせながら宙を待っていた。

その凜とした赤い瞳に静かな敵意を宿して。

サクラ

「映像でも分かるけど、かなり必死な様子だった……」

クロノ

「となると、何か強い目的でもあるのか……？」

難しい顔をしながら、それぞれ考えるような仕草をするサクラとクロノ。

そんな二人を心配げな瞳で見つめるエイミィ。

リンディ

「目的、ね…」

その中でリンディは一人そう呟く。

モニターに向け続けられている視線は先のような陰しいものではなく…まるで、哀れんでいるような…そんな瞳だった……。

〔遠見市 某所 市営マンション〕

「っ……………」

リビングのソファーにもたれるようにして荒い息を吐き出すフェイト。

先日出会った少年魔導師の攻撃によって、負傷した彼女の左腕には、真新しい包帯が巻かれていた。

まだダメージが抜け切っていないのか、辛そうに顔を歪めながら、腕の痛みに小刻みに体を震わす少女の姿はなんとも痛々しい。

「ダメだよ…。時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ…」



そんな主人を心配しつつも、彼女の使い魔であるアルフは酷く情けない声で言う。

今までは素人同然の少女と、その使い魔らしきフェレット一匹だけで済んでいたが、組織立って動かれると以前のようにはいかなくらはるのは必至。

ましてや、自分たちは犯罪者。下手をすれば、逮捕されて拘置所行きなんて可能性だって充分あり得る。

対峙する相手のスケールがあまりにも違うのだ。  
こちらが負うリスクが加算される事くらい誰にだって分かる。

アルフ

「もう逃げようよ、フェイト。二人でどっかにさあ…」

オレンジ色の長髪の間から生える狼耳を情けなく垂れ下げながら言うアルフ。

だが、フェイトは静かに首を横に振り、その考えを却下する。

しかし、当然のごとく納得がいかないアルフは声を荒げた。

アルフ

「だって！雑魚クラスならともかく、アイツら一流の魔導師だ！本気で捜査されたら、ここだっていつまでバレずにいられるか……」

だんだんとしぼんでいくアルフの姿をフェイトはじっと見つめ、彼女の言葉を聞いていた。

確かに、先日出会った少年の魔導師二人はフェイトから見ても一流クラスの魔導師だった。

彼らが今回の出来事を事件と見なし、本腰を入れて捜査されれば、恐らく自分たちが管理局に捕まってしまうのは時間の問題だろう。

フェイト自身、そんな事は言われるまでもなく分かっていた。

アルフ

「あの鬼婆……アンタの母さんだってワケわかんない事ばっか言うし……フェイトに酷い事ばっかするし……」

フェイト

「母さんの事……悪く言わないで……」

それまで黙っていたフェイトが、アルフに諭すようにして口を開いた。

しかし、アルフは首を激しく横に振って、

アルフ

「言うよ！だってアタシ、フェイトの事が心配だ！」

顔を上げて、フェイトを……どこまでも優しい心を持つ大事な主の顔を見つめながら、更に言葉を続ける。

アルフ

「フェイトが悲しんできるとアタシも胸が千切れそうに痛いんだ……。フェイトが泣いてるとアタシも目と鼻の奥がツンとして、どうしようもなくなるんだ……。フェイトが泣くのも悲しむのも、アタシ、嫌なんだよ……！」

フェイト

「……………」

青い瞳に涙を揺らがせながら悲痛な声で言葉を紡ぎ出すアルフの姿を、フェイトは辛そうな、悲しそうな、そんな感情で満たした瞳で、ただ見つめていた。

それから、彼女はゆっくりと体を起こして、口を開く。

フェイト

「私とアルフは少しだけど精神リンクしてるからね……」

そして、フェイトは沈痛な瞳のまま「ごめんね……」と呟き、

フェイト

「アルフが痛いなら私はもう悲しまないし、…………泣かないよ」

アルフ

「……………」

悲しそうな顔で紡がれる優しい言葉。

その言葉を聞いたアルフは大きく目を見開いた。

彼女の瞳に溜まっていた涙が、一滴の滴となってゆっくりと頬を流れ落ちていく……。

そして、アルフはそのまま床に伏せ、流れる涙を止める事なく流し続けた。

アルフ

「違う、違うんだよ…。アタシはフェイトに笑って、幸せになって欲しいだけなんだ……！なのになんで、なんで分かってくれないんだよお……！！」

フェイト

「ありがとう、アルフ…」

自分のためを思い、泣いてくれるアルフの姿を見て、フェイトの胸がズキリと痛む。

が、しかし……

フェイト

「でもね…、私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

彼女の心は……その思いは……変わらなかった…。

この選択が、自分を大切に思ってくれている者に更に辛い思いをさせてしまうと分かっているとしても、彼女の意味は変わらない。

否、変わるわけがなかった。

それは、最愛の母の願いを叶える事が自分の願いでもあるから…。

願いを叶えれば母はきっと昔の母に戻ってくれる…あの頃のように優しく笑いかけてくれる……そう、信じているから。

ジュエルシードも残り僅か。

そのためにはどんな手段を使っても、絶対にそれらを集めなければならぬ。

一つでも多く、母の下へジュエルシードを持って帰らなければならぬ。

例え、それで自分がどうなろうとも……。

フェイト

「だから……」

フェイトは閉じていた瞳を開けて、泣いているアルフの頭にそつと手を置き、優しく撫でる。

フェイト

「後もう少し、最後までもう少しだから……私と一緒に頑張ってくれる……？」

その問い掛けにアルフは泣き顔を上げ、腫れ上がった瞳を彼女に向けて、

アルフ

「約束して……あの人の言いなりじゃなくて……、フェイトはフェイトのために……自分のためだけに頑張るって……。そしたらアタシは何があっても必ず……フェイトを守るから……」

フェイトを真っ直ぐに見つめながら言う。

その瞳からそらさずにフェイトは優しく見つめ返しながら、静かに、しかし力強く頷く。

そんな彼女たちの様子を、紺碧の翼を持つ一羽のツバメが月光にその身を照らされながら、静かにじっと見つめていたのだった……。

## 〈Episode 06：強く悲しい決意なの〉（後書き）

はい、というわけで六話目もサクリと更新させていただきました。  
COMAです。

それにしても、ふと考えてみれば残り一週間ちよいで今年度終わり  
ですよ。

いやー月日が経つのはホント早いな～…って、なんか年寄りみたい  
だなあ（苦笑）

年明けにはなのはの映画はもちろん、ゲームもでるし、現在コンプ  
エースで連載中のVividの単行本も出るらしいんですね。

それに大晦日の紅白では水樹奈々さんが出場されますし、今回の年  
末年始は楽しみな事が目白押し♪  
ホント、今からすっごく楽しみです。

と、今回はここまでにして次回予告をどうぞ。

＜なのは＞

海鳴市へと戻った私たち。

リンディさんたちにはよく考えて決めてって言われたけど……やっ  
ぱりこんな中途半端なところで終わるのは嫌だよ。

最後までやり通したい、そう思った私たちは管理局に協力を申し出  
ます。

果たして私たちの意見は受け入れられるのでしょうか…？

次回、魔法少女リリカルなのは〜Prologue〜

『E p i s o d e 0 7 .. 協力願いな  
のリリカルマジカル、頑張ります！』



## Episode 07: 協力願いなノ

『ですから、僕もなのはもそちらに協力させて頂きたいと』

「協力、ねえ…」

オペレータールームのモニターの一つに映し出されている、フェレット姿のユーノの言葉を聞いて考え込むクロノ。

対するユーノは最後の一押しと言わんばかりに言葉を続ける。

ユーノ

『僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思っています。ジュエルシードの回収、あの子たちとの戦闘、どちらにしてもそちらとしては便利に使えるはずです』

彼の説得染みだ、それでいて合理的な言葉に、リンディは満足そうに頷いて納得の表情を見せる。

どうやらリンディは彼らがこう言ってくる事をあらかじめ予想していたようで、さほど驚いてはいないようだった。

サクラ

「いいんじゃないですか？彼らはこちらにとっても充分有益ですし」

クロノ

「なっ！」

唐突なサクラの賛同の意見に、隣にいるクロノは驚きの声を上げて彼を見る。

しかし、当のサクラはクロノの驚きと視線をどこ吹く風と言った風にスルーし、リンディに向けて言葉を続ける。

サクラ

「それに彼らをこちらに置く事で、ある程度の行動を制御できるのも利点の内に入りますし、残っている＜ジュエルシード＞の回収の能率も上がります」

リンディ

「そうねえ…確かにそれも一理あるわ」

サクラの冷静な意見にリンディも深々と同意する。

なのはやユーノの協力を得るという事は、すなわち彼らを自分たちの指揮下に置く事が出来る…つまり、単独の行動を防げるという事だ。

それにどちらにせよこちらに全てを任せろと言ったところで、彼女たちは独断で動く事は予想済み。

それならあえてこちらの指示に従ってもらい、彼女たちへの危険の軽減を行った方がこちらとしても何かと安心できるし、もしもの際の対応もできる訳で。

下手に動き回られるよりも、擁護の意味も兼ねての協力を仰いだ方が色々都合がいい。

リンディ

「……いいでしょう。なのはさんとユーノくんには今回の事件を手伝ってもらいましょう」

クロノ

「か、母さ……艦長！」

リンディの下した決断に抗議の声を上げるクロノ。彼としてはどうしても民間人であるのはたちを事件に関わらせたくないのだから。

それはたぶん、彼の執務官としての責任感やその生真面目さからくるもの。

つまりは巻き込みたくないのだ。これは、事件を解決する事は、自分たちがやるべき仕事だから。

そんな彼の考えに気付きつつも、リンディはやんわりとした口調でクロノをなだめる。

リンディ

「こちらとしても切り札は温存しておきたいもの。ね、クロノ執務官？」

クロノ

「……………はい」

一応は承諾したクロノだが、その表情が未だに不満そうにしてるのを見て、リンディは浅く息を吐き出してから再度口を開く……

サクラ

「それなら僕が彼女たちの監督役に就くよ」

前にサクラが口を挟んだ。

その発言にクロノやエイミィはもちろん、モニターに映るユーノ、そしてリンディでさえも驚きの表情を表していた。

四者四対の驚きの視線を受けながら、サクラは更に言葉を続ける。

サクラ

「僕が常に彼女たちと行動を共にすれば問題はないよね？」

クロノ

「それは、そうだが……」

サクラ

「大丈夫。もしもの時は僕が責任を持って彼女たちを守るから」

そう言ってサクラは微笑む。

その表情からは、自分の意見に異を唱えさせないという雰囲気がありありと滲み出ている。

当然の如く彼の頑固さを知っているクロノは呆れて溜め息を吐くしかなかった。

上手い具合に事を丸く治めたサクラにリンディがアイコンタクトをしながら「決まりね」と言い、再び真剣な表情でモニターのユーノへと視線を移す。

リンディ

「条件は三つです。一つ、両名とも一時身柄を時空管理局の預かりとする事。二つ、二人とも必ずこちらの指示に従い、それを守る事。三つ、行動時は常にサクラの監督の下で絶対に単独行動をしない事。――…いいですか？」

ユーノ

『構いません』

リンディ

「そう、それじゃあ……」

そう言ってリンディは真剣な表情を一変させ、

リンディ

「しばらくの間、よろしくね」

満面の笑みを浮かべるのだった。

その後、ユーノとの通信を終えて艦長室に戻ったリンディに続き、オペレータールームを後にしようとしたサクラにクロノが声をかける。

クロノ

「本当にいいのか？」

サクラ

「何が？」

体を半分だけ振り返らせ、不思議そうな顔で首を傾げてみせるサクラにクロノは顔をしかめさせた。

クロノ

「何が？　ってお前——……無闇に他人と関わるの嫌いじゃなかったか？」

その言葉にサクラは一瞬驚いたような顔をした後、「別にそういう訳じゃないよ」と言いながら困ったように微苦笑をする。

サクラ

「それに、それは昔の話だよ。今はもう…大丈夫」

クロノ

「……………」

サクラ

「ついでに言うと、僕が言わなくてもきつと艦長がこうしただろうしね」

この硬い空気を和らげようと、肩をすくめさせながら冗談混じりにそんな事を言ってみるサクラだったが、あまり効果はなかったようだ。

現にクロノは未だにどこか心配そうな表情のまま。その後ろにいるエイミイは何とも言えない表情でこちらの様子をうかがっていた。

そんな二人を見たサクラの表情からも一切の笑みが消え、その顔をわずかに曇らせた。

妙な沈黙がオペレータールームの空気を侵食し、支配する。

そんな空気に居辛くなったのか、それとも自分に向けられる視線に耐え切れなくなったのか、サクラはパツと表情を変え、再びその顔にいつもの困ったような笑みを浮かべる。

サクラ

「じゃあ僕は高町さんたちを迎えに行ってくるよ。やっぱり、初めの印象が大事だからね」

そう言っで、サクラは足早に……まるで、その場から逃げるかのようにオペレータールームから出て行った。

クロノ

「……………」

エイミー

「大丈夫だよ、クロノくん。サクラくんだってあれから二年経ってるんだから」

サクラの後姿が消えていったドアをじっと見つめていたクロノにエイミーがそっと声をかける。

そんな彼女の気遣いに苦笑を浮かべつつ、クロノはエイミーに視線を移しながら「そうだな」と短く言葉を返した。

それを見て少し安心したような笑み浮かべ、作業に戻るエイミーの姿を一瞥してから、クロノは心中で「だけど…」と呟き、再び視線をオペレータールームのドアへと向ける。

クロノ

（僕は未だにあいつが他人に対して薄い壁を張っているように見え



るんだ。僕たちも含めて、な…)

その考えは近くにいるエイミーにも、この場を去ったサクラにも届く事はなく、クロノの胸中だけに残り、響いていったのだった…。

## ♪Episode 07..協力願いなのに(後書き)

はい、というわけで七話目を更新しました。COMAです。

それにしてもクリスマスイヴですね。今日は暖かいから絶好のお出かけ日和♪

まあ予定のないCOMAには関係のない話ですが…(苦笑)

クリスマスイヴと言えば、A'sは昨日で最終回じゃなかったっばいです。

気になる最終回は来週らしい。ちゃんと録画準備しとかないと。

とまあくだらないあとがきはここまでにして次回予告をどうぞ。

くなのは>

管理局に協力できる事が正式に認められた私たち。

フェイトちゃんにもう一度会うために、この事件を終わらせるために、ここから頑張っていかなくっちゃ。

だけど、そのためには大切な人たちにたくさん言わなくちゃいけない事があって……。

次回、魔法少女リリカルなのは♪Prologue♪

『Episode 08..選んだ道と決意なの―前編―』

リリカルマジカル、頑張ります！

## 〈Episode 08…選んだ道と決意なの 前編〉

管理局の協力が決まった頃、なのはは自宅のリビングにて夕食の後片付けを手伝っていた。

父や兄、姉は食後の稽古のために裏山へと出かけており、現在家にいるのはなのはと母の二人のみ。

一通りの片付けが終わり、最後に母……“高町桃子”が食器棚に皿をしまい終わったところで、彼女は「さて…」と言いながらなのは方に振り返る。

桃子

「それじゃあ、お話って何かしら？」

なのは

「うん…」

あれから、アースラから海鳴市の自宅へと戻り、夕食の時間になるまで、なのははリンディに言われた通りに自室でユーノと話し合っていた。

これから、どうするのかを。

そして、決めた。管理局に協力をし、事件に関わり続ける事を。

これから母に話すのは、これまでに起こった出来事だった。

自分自身で決めた事をやり遂げるためには、これはどうしても避けては通れない道。

話さなくては、何も納得してもらえない。黙っていては、家族に心配をかけてしまう。

これまでだって充分に心配をかけていたはずだから。

親友にも見抜かれていたのだから、家族にはとっくのとうに気づかれていたはずだ。

自分が何かを抱えている事を。

そして、それを知りつつも何も言わずに見守ってきてくれた家族。

だからこそ、なのは話す。自分が魔法と……ユーノと出会ってから起こった今日までの事を、できる限り、話せるところまで、全部、全部……。

もちろん、自分がこれからやりたい事も、そのために必要な事も含めてだ。

それが、今までたくさん心配をかけさせてきた家族に対する彼女なりの謝罪であり、ケジメでもあった。

なのは

「もしかしたら危ない事かもしれないんだけど……大切な友達と一緒に始めた事、最後までちゃんとやり通したいの」

なのはの強い意志がこもる言葉を聴いた桃子は、静かに目を閉じたまま、ただ一度だけ頷いた。

なのは

「心配、かけちゃうかもしれないんだけど……」

桃子

「それはもう、いつだって心配よ。お母さんは“お母さん”だから、なのはの事がすごく心配」

顔を両手で覆いながらそう言う桃子の姿を見て、なのはも辛そうに顔を伏せる。が、

桃子

「だけどね」

続けられた言葉に顔を上げると、いつの間にかなのはの隣へと座り、いつもの優しい笑顔が浮かべる母の姿がそこにあった。

まったくの予想外だったそれに、当然の如く意表を突かれたなのはは驚いた表情をしながら、少し高い位置にある母の顔を見上げる。

桃子

「なのはがまだ迷っているようなら、ちゃんと“お母さん”らしく

危ない事はダメよーって言うと思うけど……もう、決めちゃってるんでしょ？」

なのは

「……………うん…」

優しく語りかけられるような言葉に、なのはは小さく頷いた。

自分の意思で始めた事を、こんな中途半端なところで終わらせたくない。

そして、この出来事がきっかけで出会った綺麗な瞳を持つあの子……フェイトともう一度話したい。会いたい。

それが、その思いが、彼女の決意を一際強くさせていた。

桃子

「それじゃあ、行ってらっしゃい。お父さんとお兄ちゃんにはお母さんがちゃんと言得しといてあげるから」

そんな娘の思いを直感的に感じ取った桃子は、優しげな微笑を浮かべてわが子の頭を撫でながらそう言い、

なのは

「うん。ありがとう——お母さん」

なのはは頭を撫でられながら笑顔でそう返すのだった。

そして——……

桃子

「忘れ物はないわね？」

なのは

「うん」

話を終えてすぐに出かける準備を整えたなのはは、桃子に見送られるのを背に感じながら家のドアを開け、そして、その先にある日本風の門を開ける。と……

なのは

「あ」

「こんばんは」

そこに意外な人物が立っていたので、なのはは思わず小さな声を上げる。

癖のついた艶のある黒髪に、綺麗な琥珀の瞳。着ている服こそ違  
うが、その顔に浮かべるのは穏やかな、どこか安心感を与える、出  
会った時と同じ微笑。

門外に立っていたのは他でもない。ついさっき知り合った少年……サクラだった。

なのは

《ど、どうしてあなたがここに？》

サクラ

《アースラにいる間は僕が君たちを監督する事になったんだ。フェレットくんから聞いてない？》

笑みを崩す事なく淡々と答え、問いかけてくるサクラ。

その言葉に、なのはが肩に乗っているフェレット姿のユーノへ視線を向けると、その顔を見るにどうやら言い忘れていた様子。

そのやり取りを見て、サクラもいくらか察したのか、穏やかな微笑から幾分か困ったような微苦笑へと表情を変えた。

サクラ

《まあとりあえず君たちの事を任された以上は、きちんとやらなくちゃって思ってたね》

なのは

《そうだったんですか》

念話で軽い事情を聞き、サクラがここにいる理由について納得を



得たなのはだったのだが……そこでちょっとしたトラブルが発生。

桃子

「なのはのお友達？」

なのは

「え、えっと……」

見送りのために一緒に外に出てきた桃子がサクラに少しばかりの興味を示したのである。

まさかサクラが迎えに来るとは毛の先ほども考えていなかったのはは、何て言って良いのか分からず、しどろもどろになってしまふ。

一方、問題の中心とも言えるサクラは至って冷静だった。

すぐに営業スマイルに近いものを展開し、事態解決を図る。その切り替えの早さ、コンマ一秒。

サクラ

「夜分遅くにすみません。高町さんと同じ班の“サクラ・ハラオウ”です。初めまして」

桃子

「初めまして、なのはの母です。うちの娘がお世話になってます」

丁寧に挨拶してくるサクラに、桃子も笑顔で軽く頭を下げて返す。

勝手に進んでいってしまった話に下手に入るわけにもいかず、なのは内心はらはらとした様子でユーノと共に成り行きを見守る事しかできなくなってしまった…。

そんな中でも、会話はなのはに介入の余地を与えないまま、どんどん進んでいく。

桃子

「それで今日はまたどうして家に？もしかして、なのはの事を迎えるに来てくれたのかしら？」

サクラ

「はい。集合時間の都合とは言え、夜遅くに女の子を一人にするのは危険ですから」

桃子

「あらあら、それはどうもご丁寧に」

とまあ怖いらいにほとんどん拍子で話は進み、「それじゃあ行こうか」と言ったところで、なのはは何故か桃子に手招きをされる。

何だろうと疑問を抱きつつも、サクラに少し待ってもらい、桃子へと駆け寄るなのは。

ちなみに今さっきまで肩に乗っていたユーノは、少し話があると

かでサクラの肩に移動している。

なのは

「どうしたの？お母さん」

出かけ際に「行ってきます」は言っただし、忘れ物も何回か確認をされているためでない。

一体何の用事だろう、と内心で小首を傾げながら訊ねるのは。

そして、その後に桃子の口から言われる言葉は、かなり……ほんとうに予想外のものだった。

桃子

「流石、私の娘ね！あんな超優良物件を見つけてくるなんて♪」

なのは

「ほえ？」

何を言われているのか全く分からず、思わず間の抜けた声と共に今度こそ本当に首を傾げるなのは。

一方の桃子はそんな娘に構わず、「んゝ顔も可愛いし、物腰も柔らかだし、言う事なし。あれは将来いいになるわよ。お母さんの目に間違いはないんだから」、とか何とか言っている。

どういう訳かやけにハイテンションなのがちよっぴり怖いが、母が何を考えているのか全く分からないのはは、

なのは

「え、えと、何の話？」

と聞き返してみた。

対する桃子は「またまた惚けちゃってー」などと言いながら満面の笑みを浮かべ、そして、その後になのはにしてみればとんでもない事を言っただけだ。

桃子

「あの子、なのはの“コレ”でしょ？」

ピツという擬音が聞こえそうなほど綺麗に立てられる、桃子の左の小指一本。

それが何を意味しているのかくらい、なのはも分からぬ年頃ではない。

が、しかし、あまりにも唐突すぎたのでそれを理解するのにたっぷり数秒かかり、それが終わってからしばしの硬直。

そして……

なのは

「ふええええええええー?????!?!」

本日二回目となる驚きの絶叫を上げたのだった。

ちなみにサクラとユーノの二人は安全距離と推定される位置にいたため、驚きはしたものの、前回のような耳がキーンとなる被害にはあわなかったそう。

なのは

「ち、違う、違う！違うよお母さん!!」

絶叫の後に耳を通り越して顔全体を真っ赤にさせたなのは、眼前で手をぶんぶんと振りながら慌てて否定する。

しかし、桃子にはそれが通じず、終いには「照れちゃって」と言われる始末。

それでもなお「違う」と言っただうにか誤解を解こうとするのは、

サクラ

「高町さん、そろそろ時間だ。急がないと」

腕時計で時間を確認したサクラが近付いて来て、声をかける。

ちなみに、突然声をかけられたなのはが必要以上に反応して、体及び心臓が大きく跳ねたのは言うまでもない事だ。

そんな動作さえも桃子には誤解の対象と映ったのか、頬に手を添えて「初々しいわねえ」と言いながら、嬉しそうに笑みを深めていた。

桃子

「ほら、なのは。行ってきなさい」

なのは

「だから、その、違うんだってば、お母さん！」

満面の笑みで送り出そうとする桃子と、母に背中を押されながらも最後の最後まで弁解しようとするなのは。

結局、なのはは桃子の重大な勘違いを正す事ができず、そのまま強引にサクラの方へと押しやられた。

桃子

「それじゃあ、娘をお願いしますね」

サクラ

「はい。任せてください」

と最後には桃子にしてみれば色々な意味が含まれているであろう  
その言葉とその意味を知らず快く笑顔で承諾してしまったサクラの  
会話を聞きながら、なのはは顔を赤くしたまま先行き不安な第一歩  
を踏み出すのであった……。

〈Episode 08..選んだ道と決意なの 前編〉(後書き)

皆様、少し遅いかもしれませんが新年あけましておめでとうございます。そして………本当にスイマセンでしたあ!!!!!!

年内完結を宣言しておきながら、十日以上も空けて更新を遅らせてしまい、誠に申して申し訳ありません…。

言い訳をさせてもらうと…思った以上に年末年始のバイトがキツかった事です…。

このCOMA、たかが郵便となめておりました。

はがき配りの大変さを身に染みて思い知りました。郵便局の配達員ってスゲーなと感心した瞬間ですよ。

働くって大変なんだな…。

ともかく、有言不実行になってしまった今、早めの無印編完結を、と考えているのですが、そろそろガッコーなるものも始まっていますし…。

と、とにかくにもできるだけ早く無印編を完結させたいと思います。A's編も早く書きたいし…。

そんな訳で今年もどうぞよろしくお願いいたします。

では、長ったらしいあとがきはここまでにして次回予告をどうぞ。



くなのは>

迫られる選択。もう後戻りはできない…そう思いながら、私は自分で決めた道を進み続ける事を決めました。

そして、踏み出す第一歩は…えっと、何だか色々と不安です…。

次回、魔法少女リリカルなのは～Prologue～

『Episode 09…選んだ道と決意なの―後編―』

リリカルマジカル、頑張ります！

〈Episode 09…選んだ道と決意なの 後編〉

等間隔で並んでいる街灯の明かりに照らされながら夜道を歩く三人（正確には二人と一匹だが）。

一行は目的地である海鳴の臨海公園へと順調に向かっていく訳だが……なのはは先程の一件があったせい、隣にいる黒髪の少年の事をやけにちらちらと気にしていた。

サクラ

「どうかした？」

その、自分に向けられる奇妙な視線に気付いたのか、黒髪の少年……サクラが少し不思議そうな顔をして訊ねてくる。

そんな彼に、なのはは慌てて「何でもないです」と答えようとしたが、

なのは

「な、何でもないでしゅっ?!」

慌てる思考に舌がついていけなかったのか、思い切り噛んでしまうという結果に終わった。

自分自身で噛んだとは思えぬあまりの痛みに思わず口元を押さえ、

涙目になるなのは。

サクラ

「だ、大丈夫？」

それを見ていたサクラはというと、こちらの異常とも言える慌てぶりに驚いた表情を見せていたが、すぐにそれを心配するようなものと変え、顔を覗き込むような形で訊ねてくる。

しかし、今のなのはにとってそれは一種の逆効果とも言えるようなもので。

いきなり間近になったサクラの顔に飛び上がりそうになるほど驚き、「大丈夫ですっ！」と答えながら距離をとるべく後退するが……

——ゴンッ！

なのは

「はうっ！」

背後にある電柱の存在に気付かず後頭部を強打。鈍い音が辺りに響くと共に、なのはの目裏に幾つかの星を瞬かせた。

立て続けに起こった痛み、「ううう……」と小さな苦悶の声を漏らしながら思わず蹲り、ぶつけた後頭部を両手で押さえるなのは。

すると、「く」という短い小さな笑い声が上から聞こえ、伏せていた顔を上げる。

そして、視界に映ったのはこちらから顔を背けている状態のサクラ。その姿は小刻みに震えていた。

それが、サクラが笑っているのだと瞬時に理解したなのは別の意味でまた顔を赤くさせた。

自分が運動音痴で少し抜けている事は多少なりとも自覚していたが、あまりにも間抜けすぎる己自身に、呆れを通り越して悲しくなってくる。

なのは

「うう…」

情けない自分に再度、涙が滲んでくるのはだったが、

サクラ

「あ、いや、別に馬鹿にしてるって訳じゃ…ただなんか可笑しかったからついついいうか…とにかく、その、嫌な意味とかじゃなくて！」

その涙を、どうやらサクラは自分が泣かせてしまったと勘違いしたようだ。

身振り手振りでどうにか誤解を解こうとするサクラの表情はかなりの焦りを見せていた。

そんな必死の様は、出会った時の印象とは違ってとても意外で、なのははつつい吹き出してしまった。

一方のサクラはというと、ついさっきまで涙目だった少女がいきなり笑い出したのでポカンと呆気にとられるしかない様子。

サクラ

「えっと…僕、何か変な事言った？」

なのは

「ううん、そういうのじゃなくて…。なんかすごく意外だったから」

サクラ

「意外？」

目元に溜まった涙を手で拭いながらも未だにくすくすと笑い続けるなのはに、サクラは怪訝そうに首を傾げさせた。

なのは

「うん、何て言うか――…すっごく可愛いなあって」

サクラ

「あ、あははは…」

そう言われたサクラは何とも言えない微妙な笑みを返し、

ユーノ

「な、なのは…それはちょっと…」

肩に乗るユーノは気まずそうな声で言葉を漏らす。

そんな二人の様子になのは不思議そうに首を傾げていたが、すぐにはっと気付く。サクラが…男の子であるという事を。

“可愛い”。それは基本的に女の子や小動物等に使われる言葉。

そして、同時にその言葉はあまり男の子に向かって言うものではない。大袈裟に言えば、ある意味で禁句である。

今、自分の目の前にいる子が女の子だったら、今しがた何気なく言った言葉は良い意味として捉えられるだろうが…残念ながらサクラは歴とした男の子なのだ。

例え、彼からどこか小動物染みた雰囲気が滲み出ていたとしても。

その事に気付いたなのは当然の如く慌て出す。

なのは

「えい、ごめんなさい！男の子に言う事じゃないよね…」

サクラ

「いいんだ。その…慣れてるから…」

慌てて謝罪をするなのはにサクラは困ったような微苦笑を浮かべる。…が、その背からは少しばかりの哀愁のようなものが漂っているのは気のせいだと思いたい。

それから、一行は再び臨海公園へ向かい始める。

歩いている三人の間に会話はなく、この、どこか気まずさの漂う空気のせいもあってか、微妙な空気が流れていた。

もともとは自分が原因で作り出してしまったそれをどうにかしたいと思うのはであったが、何か思いつく事もなく、ただただ俯くしかなかった。

そんな、息苦しいような沈黙が流れたまま目的地へと着いてしまふかに思われたが、

サクラ

「君は……」

なのは

「？」

不意にサクラが口を開いた事でそれはなくなった。

眩くような口調に顔を上げたなのは隣を歩いているサクラの顔を見るが、それを気付いているのかいないのか、サクラは視線を前に向けたままだった。

そして、その後につけられた言葉はなのはの今までの思考を止める。

サクラ

「君はどうしてこの事件に関わろうとするの？」

なのは

「え……」

予想外の質問だったためか、一瞬、何を言われたのか分からなかった。

今まで動かしていた足が自然と止まり、視線の先にあるのは、ほんの二、三步先にいる少年の姿だけ。

こちらに向けられている綺麗な琥珀色の双眸は月明かりのためか、どこか神秘的な雰囲気醸し出している。

出会った当初のそれとは全く違う事に戸惑いを覚えつつも、なのははその琥珀から目をそらす事ができないでいた。

そして、その瞳を持つ少年は今までの優しげな口調とは違う、事務的な、淡々とした口調で言葉を続ける。



サクラ

「このまま僕たちに任せておけば君は元の平和な生活に戻る。もう怖い目に合わなくても済む。なのに……どうして、君はあえて危険な道を選んだの？」

そんな質問をしてくるサクラの表情は真剣で、先程なのはが見た可愛らしい一面があるようには全く見えないほどに大人びて見えた。

なのははその雰囲気には飲まれないように無意識に表情を引き締め、強い眼差しでサクラを見つめながら答える。

なのは

「私は、もう一度あの子：フェイトちゃんと会って、きちんとお話が見たいんです」

紡がれた言葉の中には、小学三年生とは思えぬほどの強く、しっかりとした意思がこめられていた。

強くも優しいアッシュグレイの瞳が、真っ向から琥珀の瞳とぶつかり合った。

その視線をそらさず、逆にぐっと見据えて、なのはは言葉を続ける。

なのは

「フェイトちゃんが<ジュエルシード>を集めているのには何か訳

があると思うんです。私は、その理由が知りたいから……」

サクラ

「この事件に関わり続けると？」

サクラが引き継いだ言葉になのははゆっくりと首を縦に頷かせた。

自分の決意した思いを、不屈の心に誓った強く、そして優しさの宿る瞳。

その瞳はどこまでも純粹で、真っ直ぐで、でも、だからこそ見える危うさがあった……。

そんな、なのはの瞳をサクラはしばらくの間じっと見つめていた。が、やがて小さな溜め息を漏らす。

サクラ

「君の言いたい事は分かった」

と、サクラはそこで言葉を区切り、一拍置いてから「だけど」と続ける。

サクラ

「今の君じゃ、彼女には勝てない」

なのは

「……………」

告げられた現実には、真っ直ぐな瞳に初めて影が差した。

今まで毅然に見つめ返してきていたその瞳は地面へと落とされ、そのまま上がってこようとはしない。

表情に影が差し、俯き気味になっているのはの耳に諭すような口調のサクラの声が届く。

サクラ

「君も彼女と何度か杖を交えているようだから分かっているとは思うけど、話し合いだけじゃもうどうにもならない。自分の言葉を聴いてもらうためには、戦って、そして勝たなくちゃいけない」

ユーノ

「でも、なのはは今まであの子と対等に渡り合ってきたんですよ？ 勝つ見込みだって低くはないんじゃない……」

俯いているなのはの代わりにユーノがフォローを入れるが、サクラは「いいや」と首を横に振る。

サクラ

「確かに高町さんはスクライアくんと出会って、魔法を知ったばかりの頃と比べると格段に成長したのかもしれない。だけど、相手はきちんと修練して身につけた高度な戦技と経験を持ち合わせたプロ

だ。たった数日間の実戦で塗り固められた力と長い時間をかけて染み込んだ力が本気でぶつかり合ったらどっちが勝つのかは明白だ」

ユーノ

「ということは、今までなのはがフェイトと対等に戦っていたのは……」

サクラ

「予想で悪いけど、たぶん手を抜いていたと考えるのが妥当だと思う」

ユーノ

「……………」

その言葉にユーノは押し黙ってしまった。その表情からは、重い病を宣告された時のような、絶望的なものがありありと感じ取れる。

そして、当人であるなのも告げられた現実言葉が出せず、ただ黙り続けていた。

なののはにしてみれば、できれば信じたくない事だろう。もし、そうだとすれば自分がフェイトに挑んだとしても敗北するしかないという未来が見えてしまうから。

しかし、その心のどこかではその言葉を冷静に肯定する自分がいるのも確かだった。

魔法と出会って、フェイトと出会って、何度も杖を交えてきた。

ある時は旅行先の近くにある湖で、ある時は市内のビルが乱立する場所で、またある時は夕方の臨海公園で。

しかし、今その時の戦闘を一つ一つ思い返してみれば、そのどれもが彼女が100%の本気で向かってきているようには見えなかった。

なのは

(どうして……)

今まで気付かなかったのだろう、と胸中で呟く。

自分と彼女を比較すればすぐに分かる事だったはずなのに。

魔法を覚えたての自分がフェイトと対等に渡り合えるはずがない。全ては彼女が“手加減”をしていたからこそ、渡り合えていた。いや、渡り合わせてもらっていたのだ。

その事実は少なからずなのはにショックを与え、そして同時に言いようのない悔しさをもたらしした。

自然と下唇を噛み締める。

魔法を知って、そして少しずつ使いこなせるようになってきて、フェイトとの戦いを繰り返して、少しは強くなった気でいた。

しかし、それは単なる驕りでしかなかった。

なのは

（今の私じゃ本気のフェイトちゃんには勝てない。ううん、本氣になってももらえるかどうかさえもわからない…だけど……）

自分がまだまだ未熟だったという事は分かった。

今の自分のままフェイトに向かっていってもその先にあるのは敗北だという事も。

だけど……

なのは

「それでも……」

サクラ

「気持ちが変わらない？」

俯いたまま小さくコクリと頷く。

無茶だと、無謀だと分かっているけどこればかりは諦められない。

否、諦めたくない。

その会話を最後に双方の間に再び流れる沈黙。その沈黙は深い、闇のようになのはには思えた。

そして、永遠に続くんじゃないかと思われる暗い闇は……

「力が、欲しい？」

聞こえてきた言葉によって光へと導かれる。

そして、それに添うようにしてなのは今まで俯かせていた顔を上げた。

上げた視線の先にあるのは、先と変わらず空から静かに降りてくる明かりで姿を照らし出されているサクラ。

だが、今の彼の瞳は先とは違う。

それは、初めて出会った時に見た、優しげで、どこか安心できるような……そんな瞳。

いきなりの変化にキョトンとした表情を浮かべてしまうのはに對して、サクラは小さな柔らかい微笑を浮かべてゆっくりと言葉を続ける。

サクラ

「彼女に勝つための……いや、彼女に“通じる”力……かな？」

上げた視線をまた地面に落とす。

さっきからこんな動作の繰り返しだな、と思いながらなのは今

までのフェイトの戦闘を思い返していた。

きっと今の自分ではフェイトに本気を出させる事はできない。

手加減されたままでは、きっと自分の気持ちは、伝えたい言葉は、彼女に聞こえてはいても、届きはしない。

例え、自分が勝ったとしても。

だから……

なのは

「はい……」

なのはは小さな声でそう言い、頷いた。

サクラ

「それを手に入れるためには生半可な努力じゃ足りない。きっと、すごく辛いかもしれない。苦しいかもしれない。……それでも？」

なのは

「これが、私自身が決めた道だから……、終わった後に後悔なんてしたくないから……自分の思いを貫ける力が……欲しいです」

サクラの問いになのはは真っ直ぐな瞳を向け、今度は力強く、そ



してはつきりと言いつた。

手加減されて勝ったのでは意味がない。

本気でぶつかり合って、自分の思いを、言葉を伝えなければ、届かない。

その思いはまだ漠然としかしていないけれど……だけど、終わってから後悔するなんて絶対に嫌だから……だから、フェイトに“通じる”力が欲しい。

そんな、なのはの強い願いがその瞳にしっかりと表れていた。

その瞳を見たサクラは静かに目を閉じて一度だけ頷き、そしてすぐに満足げな笑みを浮かべ、

サクラ

「そっか、なら話は早いね」

なのは

「ふえ？」

楽しそうにそう言った。

対するなのははというと、予想外のそれに思わず間の抜けた声を漏らし、キョトンとするばかり。

そして、そんななのはの様子などお構いなしにサクラから続けら

れた一言は驚きのものだった。

サクラ

「特訓しよう」

なのは

「とっ、くん……？」

理解の追いつかない頭を抱えたまま、呆然とその単語だけを復唱するなのはに、サクラは笑みを浮かべたまま「そう」と頷き、言う。  
残っている時間は僅かかもしれないが、それでもできる事はある、と。

サクラ

「だから、僕がちよっとだけ力添えしてもいいかな？」

なのは

「で、でも、その、いいんですか……？ 迷惑じゃ……」

ようやくサクラの言っている事を理解したなのはは、不安そうな顔で訊ねる。

そんななのはにサクラは迷惑そうな顔をするどころか、「もちろん」と言いながら先よりも更に笑みを深めさせた。

サクラ

「それに、僕たち管理局としても君たちからの協力を受ける以上あまり失敗はできないんだ。つまり、君たちには何が何でも勝ってもられないと困るって訳だから、問題はなし！」

なのは

「あ……」

なのははサクラの顔をしばしの間ポカンと見つめていたが、それはすぐに輝きへと変わり、そして、

なのは

「ありがとうございますっ！」

満面の笑みを湛えてそう返したのだった……。

〈Episode 09…選んだ道と決意なの 後編〉（後書き）

はい、という訳で九話目を無事に更新しました。COMAです。

えー明日からガッコーが始まります。若干、憂鬱です。

何故なら……冬休みの宿題終わってねえー！！！！！だからです。

発覚したのはほとんど今朝で、久々に通学鞆を開けたら……『冬休みの宿題一覧☆』という紙が発掘されて……。

いやーそれを見た瞬間はさすがに頭の中が真っ白になりました（泣笑

まあ始業式のすぐ後が三連休だったのでどうにか命拾いができた訳で…、早速宿題終わってないグループを結成して明日から取り組みたいと思います（苦笑

まあそんなこんなのがきここまでにして、次回予告をどうぞ。

くなのは＞

サクラくんの心強い協力も加わって、いよいよ特訓開始！

この選択をした事を後悔しないように、悲しい瞳の意味を知るために、たった一つの運命に立ち向かう準備を私たちは始めます。

次回、魔法少女リリカルなのは〈Prologue〉

『Episode 10…特訓開始っ！なの』

リリカルマジカル、頑張ります！

## 〈Episode 10…特訓開始っ！なの〉

なのはとユーノの二人が管理局に正式な民間協力者として所属する事になってから数日。

残りの〈ジュエルシード〉については、優秀なアースラスタッフたちの根気のいる搜索作業によって、順調かつ無事に封印・回収されていた。

そんな、毎日が慌しく過ぎて行く中、アースラの訓練場では……

「攻撃回避から次の行動への移りがまだ遅い！」

「っ！はいっ！」

サクラによる特訓が行われていた。

しかし、一言に特訓とは言ってもその実体は、繰り返し、それこそ飽きるまで模擬戦を行うだけなのだが、サクラ曰く「百日の修行より一日の実戦」らしい。

なので、なのはたちがアースラにお世話になり始めてからもう何度も同じような模擬戦が繰り返されている。

そして、その様子をオペレータールームのモニターで傍観している者たちかというと……

エイミィ

「うっわー…、サクラくん女の子相手に全くの容赦なしだねー」

クロノ

「いや、あれでも手加減はしている」

引きつった苦笑いを浮かべながら、絶えず爆煙が立ち込めるモニターを気の毒そうに見つめているエイミィと彼女の言葉に冷静な訂正を入れるクロノ。

ちなみにユーノは模擬戦終了後の治療等を行うために訓練場にいる。

この激戦に巻き込まれていなければいいのだが…、と心の片隅で思う二人であった。

クロノ

「まあ短期間でのレベルアップには繰り返しの実戦が一番だ。それにサクラもただ相手をしているだけじゃなくて、きちんとなのはレベルにあったメニューを作っているようだしな」

そんな事を言いながら、クロノはモニターの中で必死に漆黒の魔力弾を受け止め、回避する白いバリアジャケットの少女の姿を見つめていた。

確かに、クロノの言う通り残された僅かな時間で上達を目的とす

るのならば、ちまちまとした基礎の繰り返しよりも、実戦形式の模擬戦の方が効果的だ。

現に、なのはが魔法を知ってからの上達は<ジュエルシールド>やフェイトとの実戦があったからこそその成長と言えるであろう。

しかし……

エイミィ

「……この模擬戦にメニューも何もないと思うんだけど…」

苦笑するエイミィにクロノも「確かに」と頷く事しかできない惨状がそこにはあった……。

——その頃、訓練場では……

「っ……！」

絶えず灰色の煙が視界を埋めつくそうとする中、なのははその先に黒髪の少年の姿を捉えた。

少年は灰煙の真っ只中に居り、未だにこちらの姿を発見できていないようで、しきりに周囲を見回していた。

そして、それを視認するや否や瞬時になのはは行動へと移る。

なのは

「レイジングハート！」

RH

『All right』

バスターモードとなったレイジングハートの杖先に桜色の魔力が球体となって現れ、ぐんぐんと膨れ上がっていく。

その矛先が向く場所は前方約50メートル程先に見える黒髪の少年。

照準をしっかりと合わせ、そして、なのはは表情を今までよりも一層引き締めると、魔法のトリガーワードを、

なのは

「ディバイン：バスターーーー！！！」

目一杯の力をお腹に込めて、絶叫の如く叫んだ。

と、同時に膨れ上がった球体から超高密度に圧縮された魔力の塊が砲撃となって飛び出し、未だに残る灰色を切り裂くようにして突き進む。



その桜色の砲撃は、標的となった黒髪の少年がいた空間を容易く呑み込み、そして、少年が立っていた場所からは大きな爆発が起った。

新たな灰煙がなのはの視界を埋め尽くす。

なのは

（直撃した…のかな？）

そんな事を考えながらも、なのはの中には確信があった。

煙で辺りが覆われていたとは言え、これ以上ない程に真芯を捉えた砲撃。

砲撃はなのはにとって一番馴染み深く、そして、得意とする種類だ。それなりの自信だってあるわけで。

しかし、それが、その自信こそが、一瞬の油断と隙を生み出す。

サクラ

「甘いよ」

その声が聞こえた瞬間、なのはの視界は灰色から一瞬にして漆黒一色に染まった。

サクラ

「やれやれ」

そんな言葉を溜め息と共に吐き出しながら、サクラは床に仰向けになって目を回している白いバリアジャケットの少女、なのはを見下ろした。

そこへ戦闘終了と見たユーノが訓練場の隅から慌てて気絶しているなのはの元へと駆け寄り、すぐに治療系の魔法を施し始める。

サクラ

「んゝスフィアのコントロールも精密さが上がってるし、動きも無駄がなくなってきたけど……」

ユーノ

「やっぱり、砲撃の後に気を緩める癖がある？」

他の部分は順調に成長・修正できつつあるんだけどなあと考えつつ、サクラは苦笑するユーノに頷きを返した。

ユーノ

「でも、なのはには驚いたでしょ？」

サクラ

「うん、結構」

そんな相槌を返しながら、サクラはユーノの淡い緑色の魔力に包まれているなのはの姿を真顔で見つめた。

ユーノの言う「驚いた」とは、彼女……“高町なのは”の異常なまでの成長速度だ。

ここ数日の模擬戦で彼女は随分とレベルを上げた。

魔力弾のコントロールの精密度、魔力の練り具合、回避や防御から攻撃に転じる行動速度、そのどれもが恐るべきスピードで上達した。

先も言ったような、砲撃後の気の緩みなど未だに甘い部分もあるが、今の彼女は出会った当初の素人ではなく、もはや一般の武装局員と同等かそれ以上のレベルにあたる実力を身につけている。

油断さえしなければ、そんじょそこらの魔導師相手に遅れを取るような事はおそらくもうないだろう。

サクラ

(ある意味、才能という言葉の領域を超えてるな…)

この特訓と称した模擬戦を始めてから、まだ数日しか経っていないのにも関わらずこの上達の早さ。言うなれば、階段を数段飛び越えて駆け上がっているようなものだ。

これが今まで<ジュエルシード>に対応できた秘密かな、と思いながらサクラは呆れにも似た苦笑を漏らした。

サクラ

「それじゃ、高町さんがダウンしたから今日はここまで。ユーノ、後は頼んでもいい?」

ユーノ

「うん。あ、レイジングハートの方はもう大丈夫そう?」

了承の言葉と同時にユーノがどうにかなのはを担ぎ上げながら訊ねてくる。

サクラ

「まあ調整とかは一通りやっておいたから…、たぶん問題ない」

そんな他愛もない会話を交わしながら、サクラとユーノは訓練室

を出て、通路を歩く。

なのはとユーノがアースラに所属するようになってから、サクラは二人とだいぶ打ち解けるようになっていた。

未だになのはだけは何故かファミリーネーム（名字）で「さん」付け呼びなのだが…。

まあそれはさて置き、なのはもユーノも今ではサクラの事は名前で呼び、敬語も使ってこないのが、現在の普通なのである。

しばらく共に歩いていたサクラとユーノは、二又に分かれた通路の前で歩を止める。

ユーノ

「じゃあ、僕はなのはを医務室に連れて行くから」

サクラ

「ユーノ」

そう一言述べてから医務室に向かおうとするユーノをサクラは短く呼び止めた。

呼び止められたユーノは「何？」と言いながら、こちらへと振り向く。

サクラ

「本当にレイジングハートの調整をしても良かったの？」

ユーノ

「どうして？」

サクラの問いかけにユーノは不思議そうな顔でそう訊ね返す。

サクラ

「どうしてって…レイジングハートに搭載されているプログラムは……」

そうサクラが言いかけた、そのとき、

なのは

「ん……あれえ、私……って、ふえ?! ゆ、ユーノくん!？」

ユーノ

「あ、おはよ。なのは」

今の今まで気絶していたなのはが目を覚まし、その言葉の先は出なかった。

自分が目覚めた場所がユーノの背だという事に気付き、慌てるなのはに、ユーノはどこかズレている返答をして微笑んだ。

ユーノ

「これから医務室まで運ぶからもう少し我慢しててね」

なのは

「ええ!?! い、いいよお!?!」

微笑みながら、なのはにしてみればとんでもない事を言うユーノに更に慌てだすなのは。しかし、ユーノはそれを全く意に介していないようだった。

そんなユーノを見て、なのはは助けを求めるような視線をサクラへと送ってくるが、

サクラ

「うん、そうだね。早く医務室に行った方がいいからそのままユーノに運んでもらうといいよ」

と、少し意地悪そうな笑みを浮かべながらそのSOSを打ち返すのであった。

結局、ユーノは聞く耳を持たず、サクラは素知らぬ顔をするので、なのはは顔を赤くさせながらも諦めるしかなかった。

そして、医務室へと向かう二人を見送ってから、サクラもまたアイスラの自室に戻るために通路を歩き出すのだった……。

## 〈Episode 10…特訓開始っ！なの〉（後書き）

はい、という訳で十話目を更新しました。COMAです。

ようやくここにきてちよつとした流れの変化がありましたね。気になるサクラとユーノの会話については次回に持ち越しです。で、その次話更新については、おそらく少々時間を取られるかもしれませんが、気長に見てもらえると嬉しいです。

このサイトの来訪者数もついに5000人超え！

正直ここまでの方々に読んでもらっているとは思っていなかったの  
で、本当に嬉しい限りです（涙）

これを励みに今後も微力ながら頑張っていきたいと思います！

それでは、くだらないあとがきもここまでとして次回予告をどうぞ。

〈なののは〉

フェイトちゃんとの再戦に備えての特訓の日々。

少しずつだけど自分自身で力がついてくるのが実感できるようになりました。

このまま目標に向けて一直線！……と言いたいところだけど、サクラくんは何か気がかりがあるようで……

次回、魔法少女リリカルなのはPrologue

『Episode 11…行動開始なの？』

リリカルマジカル、頑張ります！



## 〔Episode 11：行動開始なの？〕

巡航船アースラに、カッカツという単調なリズムの足音が響き渡る。

現在乗船中の局員たちは皆それぞれの作業に従事しているためか、艦内はしんと静まり返り、通路には人影一つ見当たらない。

その中を、足音を立てながら歩いているのはサクラ。その顔は何とも難しそうな顔をしている。

サクラ

（やっぱり、高町さんのデバイス…あれは…）

その頭の中にあるのは、つい最近になって知り合った民間協力者の少女が持つデバイスと、今さっき自分がユーノに言おうとしたことだった。

——それに気付いたのは数日前。

——アースラに彼女たちが乗船して少し経つ頃の話だ。

乗船一日目は夜も遅かったことから、個室に案内した後はそれぞれ就寝。翌日の午前中は艦内の案内をし、午後からはなのはの強い要望で早速特訓に取り組むということだったのだが……

ユーノ

「あの、ちょっと頼みたいことがあるんだけど…いいかな？」

それが終わった後に、サクラは控えめな口調のユーノ——この時はあまり親しくなかったため——に声をかけられた。

そんな彼の頼みごとの内容はというと、なのはの使用しているデバイス『レイジングハート』の整備とメンテナンス。

話によると、彼らが管理局に遭遇する前に、＜ジュエルシード＞の回収作業の際に酷く損傷してしまったことがあり、その時は自動修復でどうにか済ませたものの、未だに不安が拭えないらしいとのこと。

しかし、アースラのような巡航艦船には備え付けの整備室はあっても、生憎とデバイスの整備士は乗船していない。乗っているのは、艦船整備士が数人くらいだ。

つまり、デバイスのチェックくらいは使用者が各自に行うことはできるが、細かい作業は無理……なはずなのだが、

サクラ

（幸か不幸か一応デバイスマイスターの資格、持ってるんだよね…）

工学系の分野が好きなサクラは趣味に“機械いじり”という項目があり、偶然にもその専門知識と技術を持っていた。それも、本局

の技術開発局お墨付きの。

現在自身が使用しているデバイスも、管理局から支給されたものに自分なりの改良を施したオリジナリティ溢れるものだという事は余談である。

当のレイジングハートは「大丈夫だ」と頑なに言い張っていたが、今後の“黒衣の少女”との再戦のことも考慮して万全を期した方が良いと理由付けし、どうにか説き伏せることに成功した。

そんな訳で整備とメンテナンスを引き受けたサクラだったが……作業を始めるに連れて妙な点が二つほど見つかったのだ。

ここで説明をするが、そもそも“インテリジェントデバイス”とは、局から魔導師へと支給されることの多いストレージと違って、個人から開発者への依頼によって製作されるケースが大多数を占める。

故に、製作されたデバイスは、使用者となる者のデータを参照し、それを基にして綿密に組まれたプログラムやシステム等が搭載されているものがほとんどで、それがインテリジェントの特徴の一つとも言える。

そして、サクラが整備したデバイス『レイジングハート』は、ストライク型の砲撃を主軸とする魔導師のことを考えて組まれた補助システム等を搭載したものだ。

それは現在の使用者である“高町なのは”のスタイルに合うデバイス、ということでもある。

ここまでなら何も問題はない。しかし……

サクラ

（高町さんは魔法とは無縁の世界の人間だったはずだ。初めから自分用のデバイスを持っていた……とは考えにくい。となると、あのデバイスの本来の使用者は魔法を知るユーノってことになる。でも……）

そうなると問題が生じるのだ。いや、問題というよりかは疑問と言った方が正しいかもしれない。

それは彼、“ユーノ・スクライア”が典型的な後方支援型の結界魔導師だということだ。

レイジングハートの本来の使用者がユーノであるとするれば、彼が持つスキルとスタイルに合わせたものを積んでいるのが当然。

しかし、レイジングハートは中・遠距離からの砲撃を得意とする魔導師を考えて組まれたもので、しかも一発一発に多量の魔力を注ぎ込んで相手の一撃昏倒を狙う、局内でも極めて珍しい部類に入るストライク型。

乗船時に計測したユーノの魔力値は決して低いものではなかったが、際限なく多量の魔力を撃ち出せるほど大きなものでもない。

要は、ユーノは自分に適合していないにも関わらずそれを所持し、自身の魔法をサポートする相棒として使用していた。それが一つ目の疑問だ。

そして、二つ目の疑問は……

サクラ

（デバイスに組み込まれているプログラム。それを構築させて作られるシステム。手が込んできると言えば込んでも、少し甘い部分がある……。これは専門の人間がやったものじゃない……）

そう。使用者の詳細データがないのであまり大きなことは言えないが、プログラムの細かさやシステム作動の流れなど全体面で見れば非常によく出来たデバイスと称賛できる。

しかし、プログラムのちょっとした部分の設定が甘かったり、稼動しているシステムの一部が上手く処理できてないなど、欠点が見つかったのだ。

熟練の専門の人間がやった場合、当然の如くこうはならない。否、あってはならないことである。

つまり、レイジングハートを作ったのは専門科を凌ぐ豊富な知識はあれども、製作経験はまったくくないというペーパーか、もしくはルーキーとでも言えようか。

不釣り合いな元主人とその元相棒。

ルーキーが作ったような、傑作と言えそうで言えない小さな欠点のあるデバイス。

そして、現使用者である“高町なのは”に合っているようでどこか微妙なズレのあるプログラム。

そこから導き出される答えは限られている……というよりは一つしかないと言言できる。

だが、肝心のそれを先程聞こうとして、予期せぬ障害が発生したために聞き損ねた。

あまりにもタイミングが悪かった先の出来事を思い出し、もう少し派手に吹き飛ばせば良かったかな…、などと思わず物騒なことを考えるサクラだった。

サクラ

「……っと」

そうこう考えている内に目的地である自室を通過しそうになるときに気付き、足を止める。どうやら、いつの間にか早足になっていたようだ。

サクラ

「はぁ…。――……よし」

一度考えに没頭すると周りが見えなくなる自身の悪い癖に溜め息を吐き出したサクラは、数秒目を瞑った後、その一言と共に今までの思考回路をはっきりと入れ替えた。

レイジングハートに関しては今現在で出来る限りの整備を行ったし、手落ち気味だったところも出来るだけ修正したためシステムの不具合もないはずだ。

まあ完璧、とまでは言わないが、一応は現使用者“高町なのは”に充分マッチした最善の状態であることに間違いはない……と思われる。あくまで自分の中での話だが。

今はそれだけで良しとしよう。他にもやるべきことはたくさんあるのだから。

切り替えた頭と共に自室への一步を踏み出したサクラを向かい入れるようにして、目の前の自動スライドドアがガシューツという音と共に開閉した。

それからサクラはまず室内をざっと見回して異物が紛れ込んでいないかチェックする。

この部屋には一時期監視カメラやら盗聴器が仕掛けられていたことがあるのだ。誰がやったのかは言うまでもないことだが、あえて言うならば……己の母とそれに悪乗りした兄の補佐官である。

サクラ

（ん……大丈夫そう、かな）

何もないことを確認したサクラはとりあえずほっと安堵の息を漏らし、自室に備え付けられている簡易デスクに着いて幾つかのモニ

ターを表示させた。

モニターに映るのは今日の訓練の詳細が記録されたデータと最近の<ジュエルシード>の回収活動時のデータ。どちらも戦闘時の録画映像付である。

それを眺めながら、サクラは“とあるもの”と連絡を取るために念話を送る。遠く離れた場所にいるため、少々精神を集中させながら。

サクラ

《ラピス？聞こえる？》

ラピス

《はい、聞こえています》

呼びかけに応えたのは、清涼感が感じられるソプラノトーンの若く、綺麗な女性の声。

どこか事務的な口調を聞き、特に変わったことはなさそうだな、と感じつつもいつも通りの会話を交わす。

サクラ

《そっちの様子は？》

ラピス

《特にこれと言って目立った動きはありません。彼女たちも残り少



ないくジュエルシード〉の蒐集活動を行っていますが……」

サクラ

《局にバレた以上は常にその目が光ってるからね。隠れながらの宝探しは至難の業、か》

ラピス

《そういうことです。下手なオーバーアクションを起こせばあっという間に御用になるのが関の山ですから。こちら側にしてみれば願ってもないことですけど》

ある意味で無慈悲なその言葉に、サクラは困ったような苦笑いを浮かべながら「そうだね」と同意する。

ラピス

《それにしても、本当に宜しいんですか？このことを艦長らに報告しなくても》

その言葉に少々沈黙してから、サクラは誰にでもなく頷く。

サクラ

《今はまだ、言うべきじゃない。そう思うんだ。彼女の居場所も、彼女がくジュエルシード〉を集めている理由についても…何も……》

そう言うサクラの瞳は目前に浮かぶモニターの画面を捉えていな

い。今、瞳に映っているのは記憶の中にある“黒衣の少女”の表情と瞳だった。

今でも鮮明に思い出せる、戦闘時に見たあの表情。向けられた言葉は冷たい以外の何ものでもなかった。自分の姿が映ったあの澄んだ赤い瞳には明確な敵意が満ちていた。

しかし、その表情は彼女から発せられた無機質な言葉と口調、冷徹な声音とは裏腹に、酷く必死で、感情的で、追い詰められているように見えて。

そして、あの瞳の奥にあったのは氷柱のように冷たく突き刺さるような敵意でも、頑なに他人を寄せ付けない拒絶でもなくて……ただ純粹な、深い深い悲しみ――。

昏く沈んだその瞳は、彼女の表情と混ざり合って必死に訴えていた。苦しい、と。

自分ではこの苦しみから逃れることはできない。

だけど、自から誰かにすぐすることもできない。

手を差し伸べられても、振り払うことしかできない。

だから、だから、誰か……誰でもいいから気付いて…、私を…助けて…。

苦しいのは、もう……嫌だよ…。

そんな叫びが、彼女の表情から瞳から聞こえた気がした。そして、

それは……

サクラ

「……………」

サクラにとって、過去の自分を彷彿させる。

孤独に押し潰されて、ひどく寂しくて、悲しくて、外界を拒絶して、差し出される手を何度も何度も振り払って、だけどこの苦痛から開放されたくて、誰かの温もりが欲しくて…。

昏い瞳をし、自分の殻に閉じこもっていた小さくて脆くて弱い少年…。過去の、自分…。

ラピス

《サクラ？》

サクラ

「————っ！」

不意に頭の中で響いた声に、サクラははっと我に返った。

目の前に開いていたモニターの映像が急に視界に飛び込んできたことで、いつの間にか自分が意識を過去へと飛ばしていたことを理解した。

そのことに思わず顔をしかめさせ、己自身に心底呆れた溜め息を吐き出す。

サクラ

《ごめんラピス。ちょっと考え事してたから。何?》

ラピス

《あ、いえ…。突然、黙ってしまったので…》

自分自身に苛立っていたせいかな、つい感情的な早い口調になってしまう。

そのきつい口調に返ってきた声は、どうやら自分のせいで怒らせてしまったのではと勘違いしてしまったのか、萎縮と戸惑いが混ざったようなものだった。

それを聞き、無意識に八つ当たりをしてしまったことに自己嫌悪を感じて更に自分への苛立ちが募る。が、深く息を吸い、吐くことで何とかそれを制御し、平静を取り戻す。

サクラ

《ごめん、本当に少し考え事してただけだから。別に怒ってるって訳じゃないから》

ラピス

《はい。私こそ考えの妨害をしてしまったようで…すみません》

サクラ

《ラピスが謝ることじゃないよ。念話中に他のことを考えてばーっとしてた僕が未熟なだけだから》

ラピス

《それは御自身を卑下しすぎです》

サクラ

《そんなことないよ》

ラピス

《そんなことあります。サクラの悪い癖です》

サクラ

《……………そう、なのかな》

ラピス

《そうなんです》

あくまできっぱりと言ってくる声に、サクラは苦笑するしかなかった。

それは、今、目の前にいない相手の表情が容易に思い浮かべられたからだ。

“彼女”は昔からそうだ。こうして自分を卑下するような発言をすると、自分のことでもないのに本気で怒る。

あくまで、いつもの冷静で事務的な口調は崩さず、だけどその中

には静かな怒りを宿して、諭すように言い方で叱るのが“彼女”の昔からの怒り方なのだ。

そんな“彼女”の怒り方を、サクラは、まるで老婆のような怒り方だな、と密かに思っているが、あえて言わないでいる。

ラピス

《それで、この事を報告せずにどうするんですか？》

サクラ

《とりあえず“黒衣の少女”に会ってみようと思う》

ラピス

《相手は二人とは言え、自ら敵陣の中に単騎で乗り込むと？》

サクラ

《危険は重々承知の上だよ。だけど…、それでも……《わかりました》…え？》

自分の声を遮った承諾の言葉にサクラは素直に驚き、数秒の間、目を瞬かせた。

サクラ

《えっと……反対、しないの？》

ラピス

《何故、私が反対するんですか？》

サクラ

《何故って……》

こちらの質問を逆に質問で返され、言葉に詰まる。

そんなこちらの様子を知ってか知らずか、再び“彼女”の凜とした声は響く。

ラピス

《確かに多少なりの心配はあります。しかし、私はあなたの翼であり、あなたは私の主。私は私の翼主を信じていますし、誰よりもあなたのことを理解しているつもりです》

まるで、「馬鹿にしないで下さい」とでも言うような彼女の言葉にサクラは少し意表を突かれたが、すぐに表情を崩し、苦笑にも似た笑みを浮かべる。

サクラ

《うん、僕もラピスのことは翼として誰よりも一番に信用してる。だから、協力してもらってもいいかな？》

ラピス

《はい。我が翼はあなたと共に》

それを聞き、サクラは表情を綻ばせながら“彼女”に自分が留守にしている間にやるべきことなどを告げ、一通り言うべきことを言ってから念話を終了させた。

目前に開かれたモニターにはすでに今日までの訓練データの詳細が編集された映像と共にしっかりとまとまっている。これで、次回からはより効率の良い訓練に励めるはずだ。

サクラ

「さて…」

データの最終チェックを終えて表示させていた全モニターを閉じたサクラは、軽い伸びをしてからデスクから離れると、その手にはすでに己の魔導杖が握られていた。

金属製の冷たいボディの感触を手を感じつつ、着慣れた銀灰色のバリアジャケットを身にまとい、足元には漆黒のサークル型魔法陣が展開される。

サクラ

「ステルス展開。転移先簡易記録コード読み込み開始」

淡々と呟かれるサクラの言葉に呼応するように、魔法陣から発せられる輝きが室内一体を覆い込み、色褪せたモノクロへと染め上げた。



周囲が無機質な世界へと変わったのを確認すると、サクラはすぐに次の術式の構築を頭の中で開始。数秒とかからずに構築し終えた術式を発動させるためのトリガーワードとなる言葉を詠唱する。

サクラ

「開け、いざないの扉。我が示す地へと我をいざなえ」

その詠唱を機に魔法陣から発せられる輝きがより一層強くなり、漆黒の粒子が宙を舞う。

ゆっくりと空を彷徨い、淡く儂い輝きを放つその粒子たちはまるで——黒い淡雪のよう。

そして、サクラは自身の周囲を舞い散る黒い雪たちを引き連れてその場から姿を消すのだった……。

## 〈Episode 11…行動開始なの?〉(後書き)

はい、という訳で皆様お久しぶりでございます。COMAです。

今回は一ヶ月という更新の遅延及び一ヶ月ぶりのくせにまったく進歩のない文章力で誠に申し訳ありません。

特に今回は長ったらしい上に駄文の羅列の2コンボで、大変読みにくくなってしまいました(汗)

毎回の如く謝罪を繰り返してばかりいる訳ですが、一応反省はして改善しようと奮起しているんですがね……これでも…。

ああ…進歩のない自分…。本当に泣けてくる…。(落

とまあここでうだうだ言っているのはわざわざここまで読んで下さっている方に申し訳ないしウザイと思われるので、あえて開き直ります!

なのはの映画は泣けるし、ゲームの方は面白いし、水樹さんの新曲はもう神さながらだし、良いこと尽くめです♪

特に水樹さんの新曲。マジ超カッコよい!超歌うまい!ホント感動!!

ああ…一回でいいからライブ行ってみたいなー。

CDであれだけの威力があるんだから、生で聞いたらもっとすごいんだろうな。

もし聞けたら思わず涙するかもしれん(笑)

んー考えたら更に行きたくなってきた…。

郵便のバイト代はゲームとかに使っちゃったし…春休みにまたバイトしようかなー。

とまあそんな訳で、長い長いあとがきはここまでにして次回予告をどうぞ。

<なのは>

確かめたいことがある。そのために、たった一人でフェイトちゃんたちに会いに行くサクラくん。

突然目の前に現れたサクラくんに、フェイトちゃんたちはどう相對するのでしょうか…?!

次回、魔法少女リリカルなのは〜P r o l o g u e〜

『E p i s o d e 1 2 … 出 会 い は 突 然 に な の 』

リリカルマジカル、頑張ります！

P・S・

えー予告雰囲気ぶち壊してすみマセンがお知らせです。

今週から私COMAめの学校は地獄の定期テストが開催。

更にそれが終わったあとは最悪の長期研修旅行に行かなくてはならないため、次回の更新は早くても三月中旬くらいになると思われるます。

ああ、学年末…。ここで点取らないと留年決定なんです…。

ともかく、気合い入れて頑張りたいと思います。

## Episode 12.. 出会いは突然になの

高々としたビルが乱立する海鳴市中央区。時刻は夕刻よりも少し前。天候は至って良好。

どこまでも広がる青色が無機質な森を抱くようにして眼下に納めている中にサクラはいた。

かなりの高度にいるために身にまとう銀灰色のバリアジャケットの裾が暴れ、髪が激しく乱されるが、それを意に介した風もなくサクラは空と共に真下に広がる光景をただ見下ろしていた。

サクラ

「うん、この辺りでいいかな。頼むよ<WITH>」

ウィズ

己の手に持つ寡黙な相棒を見て微笑みながらそう呟くサクラの足元に漆黒の魔法陣が展開される。

WITH

『調査領域展開・搜索開始』

無機質な電子音が発せられるのと同時に魔法陣の輝きが一段と増し、サクラの脳内には膨大な量の情報が次々と流れていく。

やがて……

サクラ

「……………見つけた」

目的の情報を見つけると、サクラは集中するために閉じていた瞳を開け、反応があった方向へその琥珀の双眸を向ける。

サクラの視線の先にあるのは真下に広がる近代的な森とは違い、青々と茂る自然の森。

その光景を確認したサクラは体を翻して、海鳴市の郊外に向かい飛翔していくのであった……。

〵海鳴市 郊外〵

「……………」

黒いバリアジャケットに身を包み、片手に「閃光の戦斧」という異名を持つ相棒を携えながら、フェイトは今、目前に広がっている湖面を静かに見つめていた。

何気なく色の映る世界を閉ざしてみる。

そよ風に吹かれささやく木々。

この森に住む鳥たちのさえずり。

そして、さらさらと流れる小川のせせらぎ。

自然の声に耳を傾けるフェイトの特徴的な長く豊かな金髪を、湖面を滑ってきた風が静かにさらっていった。

そんな穏やかな時間が彼女を包みゆったりと流れていく。そう思われたが、

フェイト

「————きた」

瞬間。フェイトの一言とほぼ同時に湖面が盛り上がり、次いで何かが破裂したかのように巨大な水飛沫が高々と舞い上がったことでその時間は消え去った。

自身に降り注いでくる大量の水を黒いマントで払いのけ、フェイトは空中へと飛ぶ。

フェイト

「アルフ！」

アルフ

「あいよっ！」

フェイトの短い呼びかけに応じてアルフがすぐさま色褪せた空間を作り上げ、この場を中心とした周囲一帯を封鎖領域の内に閉じ込めた。

それを確認してからフェイトは湖へと視線を戻す。

彼女の視線の先にあるのは、何やらぐねぐねと気色悪く蠢く深緑色の物体。

どうやら今回の＜ジュエルシード＞は、原生生物か、もしくは湖底の水草を媒介にして発動したらしい。そんな漠然とした検討をつけながらフェイトは毅然とした目付きでその物体を見据えた。

フェイト

「アルフ。サポートお願い」

アルフ

「ああ！任せときな！」

その心強い声に微笑み、フェイトは金色の魔法陣を足元に展開させると、

B  
D

『A r c s a b e r』

サイズモードに変形させたバルディッシュを振りかぶり、そして、

鎌の部分として生成された金色の魔力刃を目標に向かって放った。

放たれた魔力刃は旋回しながら湖面から伸びる同色の触手のようなものを切り裂き、＜ジュエルシード＞が寄生しているであろう本体に向かっての道を作り出す。

そこへ間髪入れずにフェイトがロケットスタートで切り込む。

新たに行く手を遮ろうとする触手は後方から飛んでくるアルフのバインド等によって一緒くたにまとめられ、間に合わないものは自分で切り落としていく。

フェイト

「はあああああッ！！」

そして、一気に本体へと詰め寄ったフェイトはバルディッシュを上段から一息に振り落とし、両断しようとするが……

——ガキイイインン！！！

フェイト

「ッ！？」

目前に現れたフィールド系のバリアによって阻まれた。



フェイト

（この間の巨木と同じバリア……。しかも前のより硬い……！）

これは一筋縄ではいかないと思ったフェイトはすぐさま後退を試みるが、

アルフ

「フェイト！下ッ……！」

フェイト

「！？」

自分の真下から奇襲の如く勢いよく湖底から伸び上がってきた触手に右足を捕られる。

すぐさまそれから逃れようとバルディッシュにて触手を切り払ったが、切り口から新たな触手が幾つも生え出して、それらは一斉に踊りかかった。

その事実には驚く間もなくフェイトは全身の自由を奪われ、身動きが出来なくなる。

アルフ

「フェイト……！」

窮地に陥る主の姿を見てすぐさま駆けつけようとするアルフだったが、それが許される訳もなく。

無理にでも進もうとする彼女の前に、数えるのも馬鹿らしくなるほどの触手の群れが水面から現れ、それ以上の進行を阻害する。

アルフ

「くそッ！」

悪態を吐きながらもそれらを跳ね除けようとするアルフだったが、多勢に無勢だった。

フェイト

「くっ」

一方のフェイトは、絡みつく触手からどうにか抜け出そうと体を捻ってみるが、もちろん、そんなことで逃れようもない。

魔法による拘束でもないためシステム介入は不可。

触手を攻撃しようにも再生能力が早すぎるし、この量だ。離脱しようとしてもすぐにまた捕まってしまうのが目に見えている。

フェイト

（それなら…！）

フェイトは表情をきつと引き締めると、自らの周囲にフォトンスフィアを生成する。

狙うはこの触手を操っていると思われる本体。

本体を攻撃すれば、怯んで拘束が解け、離脱する隙が生まれるはず。そう考え、フェイトはフォトンランサーを本体めがけて放とうとする。

しかし、その考えを読んだのか、はたまた彼女からの敵意を察知したのか、触手はモゾリと不気味に動くと、

フェイト

「あああああああッ!!!!!!!!!!」

電撃が華奢な体を迸り、少女の悲痛な叫びが湖にこだまする。

アルフ

「フェイトおッ!!」

その叫びを聞き、必死の形相でフェイトの元へと行こうとするアルフだったが、それを嘲笑うかのように触手の数は増えるばかり。

アルフもまた、自分の身を守るだけで精一杯だった。

フェイト

「っ…はあはあ……」

容赦のない電撃を喰らうもどうにか意識だけは飛ばすまいとしたフェイトだったが、意識は朦朧とし、今まで蓄積された疲労等もあって、ほとんど限界の状態だった。

それでも諦める訳にはいかないと抵抗を続けようとするが、その意思に反して体はピクリとも動かない。

遠くでアルフが何か叫んでいるのが聞こえるが、それに応える力はない。

揺れる視界の中に自分に止めを刺そうとしている本体の姿が映るが、体を動かす力さえもない。

フェイト

（ごめんなさい…。……か、あさん…）

フェイトはそう心の中で呟き、己のルビーのように赤い瞳を闇へと閉ざした。

薄れ行く意識の中で、フェイトは雷鳴にも似た音と共に、自分の体が温かな温もりに包まれたような…そんな気がした……。

フェイト

「ん……」

闇色一色だった意識が徐々に色を取り戻し、フェイトはうつすらと閉じていた瞼を開けた。

ぼんやりとした視界は数度の瞬きの内にクリアになり、そして最初に飛び込んできたものに驚いたフェイトは勢いよく体を起こす。

フェイト

「ここって……」

周囲を見回したフェイトの目に映るのは、ひどく殺風景な室内。この数ヶ月ですっかり見慣れてしまった場所の景色。

そこは、この世界で〈ジュエルシード〉の集めるために拠点として選んだマンションの寝室だった。

フェイト

(何で、ここに…)

己の記憶が正しければ、自分は確かアルフと共に郊外に見つけた  
＜ジュエルシード＞の回収に赴いていたはずである。

それで＜ジュエルシード＞が寄生した原生物らしき物体と交戦  
して……その後は記憶が少々曖昧だが、自分の置かれた状況が芳し  
くなかったのは覚えている。

この拠点の寝室に寝かされていたということは、気絶した自分を  
誰かがここに運んでくれたことになるが、そうなると思い当たる人  
物は一人。いや、一匹か？

それよりも＜ジュエルシード＞は？ちゃんと確保できたのだろうか？

フェイト

(……………ここで考えててもしょうがない、か)

しばらくの間、一人で色々と思案を巡らせていたフェイトだった  
が、そう思い立つとベッドから抜け出し、寝室を出て廊下へ。

とりあえずは現状確認のためにリビングへと向かい、次いでその  
ドアを開け、

フェイト

「え…？」

最初に鼻腔を突いた甘い香りに、一瞬、体と思考を硬直させ、僅かに目を見開いた。

何故そうなったのかというと、この場所にこんな香りが漂うことが絶対にあり得ない現象だからである。

理由は至って簡単。自分自身も含め、この家には料理ができる者が誰一人としていないからだ。

まあこの世界なら至るところで調理されたものが当然のように売っているため、別に料理ができないからといって対して困るような問題になる訳でもなく。

故に、ここ数ヶ月の食事については昼夜問わずに営業している“コンビニ”などで簡単な食事を購入し、済ませていることが多かった。

無論、栄養バランスといったものはまったく考えていない。

しかし、そうなる一つの確信が生まれる。この場に自分知る以外の“誰か”がいる、と。

そこまでフェイトが思考を回復させた次の瞬間。

「フェイトお!!!」

自分の名を呼ぶ声が聞こえたと思ったら、視界一杯に見慣れた赤みを帯びたオレンジ色が飛び込んできた。と、同時に柔らかな温もりが全身を包む。

フェイト

「アルフ…」

その温もりの名をフェイトは静かに呼んだ。

抱きしめられているために表情は見えないが、体が小刻みに震えていることからきつと泣いているのだろう。そう思い、フェイトはその髪を愛おしむように優しく撫でる。

フェイト

「心配かけてごめんね。アルフ」

アルフ

「アタシこそ、フェイトを守るって言ったのに……ごめんよ…」

青い瞳からぼろぼろと涙を零しながら言うアルフに、フェイトは優しい眼差しを向けながらゆっくりと首を横に振った。

その後、アルフは「痛いところはないのか」とか「気分は悪くないか」だとか色々心配して聞いてきたが、フェイトは全てに首を



振って大丈夫だと伝えた。

それを聞いてほっとしたような表情をするアルフに、フェイトは早速「誰かいるのか」と訊ねようとしたが、

「あ、起きたんだ。ちょっとキッチン借りてるよ」

聞きなれない声が耳に届き、その言葉を吞み込んだ。

その、どこかズレているような言葉の発生源は、普段はまったく使っていないキッチン。

ほとんど反射にも近い状態でフェイトがそちらへと目を向け、そして固まる。

フェイト

「どうして… “あなた” が……」

呆然と呟くフェイトの視線の先には……少し癖のある黒髪に綺麗な琥珀の双眸を持つ一人の少年の姿。

その少年は、数日前にこの市にある臨海公園にくジュエルシードへの回収しに行った際に出会い、そして攻撃を仕掛けてきた管理局の魔導師だった…。

そして、フェイトの呟きにも近い疑問の声に答えたのは少年では

なく……

アルフ

「ごめんよ、フェイト。アタシが連れて来たんだ……」

他でもないアルフだった。

視線を上げると、そこには耳を情けなく垂れ下げて申し訳なさそうにしている己の使い魔の顔があった。

「どういう意味？」と、フェイトが促すまでもなくアルフはポツリポツリと語り始める。何故、敵である管理局の少年魔導師がここにいるのか。その経緯を……。

## 〈Episode 12…出会いは突然になの〉（後書き）

という訳で十二話目を更新しました。COMAです。

ようやく研修旅行から帰って来れました（汗  
た、大変だった…（涙

しかーし！学年末も検定も終わり、最後の関門である研修旅行も終  
わった今、後は何もない！！  
訪れる春休みをenjoyしたいと思います！！

あ、もちろん更新もしますよ？……時々…。

そんな訳でこれからも頑張りますのでよろしくお願いしますっ！  
では、次回予告をどうぞ♪

<フェイト>

こんにちは。今回は私、フェイト・テストロッサが担当させてもら  
います。

私たちの前に突然現れた管理局の少年魔導師。

アルフが語った経緯とその事実を知って、私は混乱します。

彼にとって私たちは敵のはず。それなのにどうして……？

次回、魔法少女リリカルなのは〈Prologue〉

『Episode 13…キーワードはフレンチトーストなの？』  
アルカス・クルタス……えっと、頑張ります…！

〈Episode 13…キーワードはフレンチトーストなの?〉

「フェイトッ!!」

あの後、フェイトが気を失ったのを逸早く察知したアルフは強引に触手のバリケードを突破し、全速力で彼女の救出へと向かった。

しかし、アルフが岸近辺にいたのに対してフェイトがいるのは湖のほぼど真ん中。そこへ辿り着くには多少なりの時間を要するのは当然のこと。

加えて触手の追撃もある中、アルフは必死の形相で湖面を奔走した。

自分が彼女を守る。いや、守り抜いてみせる。そう、誓ったんだ!

と、胸中で叫びながら、残り二十メートルほど手前まで迫ったところで——それは起きた。

——ゴオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

雷が轟いたかのような轟音がアルフの耳を劈くのと同時に空から降ってきた幾つもの黒い柱。

無論、本体として上空から降ってくるその攻撃に気付き、瞬時にバ

リアを張っていた。にも関わらず、その黒柱たちは驚異的な貫通力をもってそれを突破。見事に全柱直撃した。

自らの身に突き刺さる痛みに耐えかねて全身を気色悪くぐねつかせるその姿を、一時呆然と見ていたアルフが慌てて視線をフェイトがいたであろう場所に戻すと……

アルフ

「ソイツが立ってたんだ」

それからはくジュエルシード>そっちのけで、フェイトを抱える少年に食って掛かったアルフだったが、対する少年は「今はそんな場合じゃないだろ!」と一喝。

その言葉にアルフも頷くところがあり、とりあえずは一時休戦ということで不本意ながらも共同戦線を張りくジュエルシード>を無事鎮圧。

封印作業を終えた少年に「どこか安全な場所はないか」と訊ねられ、さんざん迷った末に渋々ここに連れて来た……ということらしい。

少年

「流石に驚いたよ。くジュエルシード>を探知して来てみたら、いきなりあんな場面に遭遇するなんてね」

黒髪の少年は苦笑しながらそう言った後に、「でも大事にならなくて良かった」と言って破顔する。

その表情を胡散臭げに見るアルフと眉目を顰めさせながらも困惑の表情を浮かべるフェイト。

彼女たちが怪訝に思うのも無理はない。それほどに、目の前の少年が取った行動は妙としか言いようがないものだった。

何故なら、彼は管理局の魔導師で、自分たちとは敵対する立場にいる存在。それなのにも関わらず、少年はその“敵”を助け、なおかつ怪我の治療までしている。

おまけに、仮にも“敵”の拠点にいるというのにこの落ち着き様。不可解としか言いようがなかった。

フェイト

「どうして…私は、あなたの敵なのに…」

口をついた小さな疑問の声は、どうやら少年の耳には届かなかったらしい。少年は「そろそろいいかな」という的外れな台詞を残してキッチンの奥へ姿を消した。

それを見て、この甘い香りを部屋に漂わせている人物が彼なのだと漫然とだが理解するフェイト。

少年

「二人ともお腹空いてない？」

そんなフェイトの考えを肯定するかのように、再びキッチンから顔を出した少年がそう訊ねてくる。

アルフ

「アタシは別に…」

どこか楽しそうに聞こえるその声に、未だに怪訝そうな顔をしながらもそっぽを向いて答えるアルフ。

その後が続いて、「私も別に」と言おうとしたフェイトの口よりも先に、

——くう……

小さな、しかし無駄に広いリビングならではの反響をみせる自己主張の音が、彼女を意思を無視して腹部から飛び出した。

咄嗟に、というか思わず顔を隠すように俯かせるフェイト。

自分の頬が瞬時に熱を持ったのがわかった。恐らくはこちらを驚いた表情で見ているであろうアルフと少年の視線を、嫌というほど肌に感じる。

少年

「えっと、そんなに大したものってわけでもないけど…、それでもいい?」

戸惑いが窺える少年の問い返しに、フェイトは少し抵抗を感じつつも小さく頷いた。

「それじゃあ少し待ってて」という少年の声を後ろに聞きながら、フェイトは顔を俯かせたまま黙ってリビングにあるテーブルの一席に着く。

普段はあまり食べることに執着しない自分。

この世界に来てからも、まともと言えるような食事は取っておらず、アルフがわざわざ用意してくれた食事も残してしまう……というよりも、ほとんど手を付けないことが多かった。

悠長に食べている時間ひまがあるなら＜ジュエルシード＞を探すべきだ。そう考えていたし、大した食事をしなくても問題ないとも思っていた。

実際に、その食生活で空腹を感じたことは今まで一度もなかったし、活動に支障を来たすこともなかった。

——なのに、どうして今になってこんな…。

そんなことを考えながら、フェイトが自分自身に戸惑いを覚えていると、



少年

「どうぞ」

目の前に、少年が持ってきた皿が置かれた。

フェイト

「あ…」

リビングに入ってきたときよりも強く、しかし柔らかな、鼻腔をつく甘い香り。そして、それを見たフェイトは思わず声を漏らす。

ふわりと漂う甘い香りと共にゆらゆらと白い湯気を立ち上らせるそれは、フレンチトーストだった。

数瞬それを見つめていたフェイトは、やがて皿の横に置かれたフォークを手に取り、綺麗な一口大サイズに切り分けられている内の一切れを口に運んだ。

フェイト

「……おいしい…」

思わず口から零れた言葉。

その声は、耳をよく澄ませていないと聞こえないような小さな声だったために、少年には聞こえなかったようだが……

アルフ

「……………」

彼女の側にいて、なおかつ耳が良いアルフにはしっかりと聞こえていた。

加えて己が主人から流れ込んでくる“戸惑い”という感情の中に、僅かだが、別のものが見え隠れしているということにも気付く。

これは喜び？幸福？それとも、もっと別の何かだろうか？

とにかく、最近ハマったく……それこそ微量の“微”の字も感じなかった良い感情だということは確かだった。

どこことなく納得がいかないうような気がするが、それでも今フェイトの中にあるこの感情は、自分にとっても嬉しいことに変わりはないので、黙ってその様子を見守るアルフだった。

それから、フェイトは十数分と経たずに皿の中身を綺麗に平らげた。

これも、普段の彼女からすればかなり珍しいことだ。

少年

「満足？」

微笑みながらそう訊ねてくる少年に、フェイトはフォークを置いて小さいながらも肯定の意味で頷いた。

それを見た少年は嬉しそうに「そっか」と言っただけを深めさせた。そして、何気ない仕草でちらりと別方向を見やる。

釣られてフェイトも彼の視線を追う。

そこにあったのは、質素な壁掛け時計。時計の長針は5を、短針は11と12の間近くを指し示している。

驚いたフェイトが慌てて視線を窓へと移すと、窓にはカーテンが引かれ、僅かに見える隙間からは一切の光も差し込んでいない。

＜ジュエルシード＞の回収に向いたときは短針が差していた数はまだ一桁だったはずだ。つまり、あれからかなりの時間が経っているということ。

そのことに再度驚くフェイトだったが、

少年

「さて、と」

椅子を引く音と共に聞こえてきた少年の声によって我に返る。視線を少年へと戻すと、少年は席からゆっくりと立ち上がっていると

ころだった。

少年は、聞くまでもなく帰るつもりなのだろう。自分があるべき場所——管理局に。

しかし、そう易々と彼を帰してしまふほど彼女たちも甘くはない。

アルフ

「待ちな」

予想通り玄関へと向かおうとする少年の前に、アルフが険しい表情で立ちふさがった。それに倣うようにしてフェイトも席から立ち上がり、逃げ道を奪うように少年の後ろに立つ。

部屋の空気が一息に張り詰めたものへと変わった。

アルフ

「アンタはフェイトを助けてくれたし、怪我の治療もしてくれた。その点に関しては感謝してるよ」

アルフはそこで一度言葉を切り、「だけど」と続ける。

アルフ

「アンタは管理局の人間だ。ここで帰すわけにはいかない」

そう言うアルフの表情は変わらず険しい。

対する少年は、静かにアルフを見上げるだけ。恐怖も、動揺も、敵意さえも宿さないその瞳で。

一つの波紋も見せないその琥珀の双眸は、この緊迫とした雰囲気の中では異様に見えるほどに落ち着き払っていた。

そして、少年は言う。

少年

「確かに僕は管理局の人間だ。だけど、僕はあくまで囑託で、正式な局員じゃない」

アルフ

「それが、何だってんだい？」

怪訝そうに眉根を寄せるアルフに少年は諭すような口調で続ける。

少年

「僕は管理局という肩書きこそ持っているけど、実際、権限的なものは何も持っていない。その代わり義務もない。――…この意味がわかる？」

少年の目前に立っているアルフはただただ眉根を寄せるだけだが、

彼の背後に立つフェイトには、少年が何を言わんとしているのか何となくだが検討がついた。

つまり……

フェイト

「私たちの居場所を管理局に言うつもりはないってこと？」

少年

「正解♪」

フェイトの慎重な疑念の声に、少年は振り向き微笑む。

アルフ

「はあ？それじゃアンタは局の奴らを裏切るってことかい？」

意味がわからないとでも言いたげなアルフが、少年にそう問いかける。

確かに、彼が一介の局員ならば今言ったことは“時空管理局”という組織に対する歴とした裏切りになるだろう。

しかし、彼は局員ではなく囑託。正式な所属ではない立場の人間。

少年

「別に裏切ってるわけじゃないよ。僕が今回与えられた任務は、捜査に協力する民間人の監視と警護。それと現場での執務官のサポートだけ。それ以外のことに关しては僕が何をしようと自由だし、一切の責務もない」

悪びれた風もなくあっけらかんと言つてのける少年の姿に、アルフは哑然とするしかなかった。

少年が言っていることは何も考えずに聞けば正当なものに思えるだろう。いや、実際のところ言っていることは何も間違つてはいない。

だが、その言動は局にいるであろう仲間を平気で裏切つても同然のこと。アルフが哑然とするのも当然だった。

一方のフェイトは冷静な瞳で少年を見つめ、言う。

フェイト

「でも、それが私たちのことを言わないという保証にはならない」

アルフ

「そ、そーだよ！どうせ、今だけそう言つておいて、局に戻ったら言うつもりなんだろう！」

今まで哑然としていたアルフもフェイトの言葉で我に返り、騙されてたまるか、という意味がありありと窺える瞳で少年を睨み付ける。

そんな二人に対し、少年は呆れたように「あのね」と溜め息を吐き出す。

少年

「もし僕の目的が君たちの逮捕なら、わざわざここまで付いて来たりなんてしないよ。それだったらあのときに応援を呼んで、君たちはとっくに御用になってる。――…違う？」

アルフ

「そっ、それはっ……………確かに…」

少年の呆れ口調に、最初こそ何か言おうとしたものの言い返す言葉が見つからずに頷いてしまうアルフ。フェイトも黙ってこそはいるが、同じように訊ねられたら頷くしかできなかっただろう。

さっきも言ったように少年の目的が“犯罪者の逮捕”だったとしたら、怪我の治療など管理局に連行してからでも充分なはず。

拠点にしても、他のことを調べるにしても、それは同じ。

事件の主犯格を捕まえたのだ。後は尋問なり何なりして聞き出せばいいだけの話に変わりはない。

二の句が告げないフェイトとアルフだが、それでもまだこの少年の言っていることを信用するわけにはいかなかった。

自分たちには分からないだけで、彼の中では何らかの意図がある



のではないか、という懸念があったからだ。

その考えが相手にも伝わったのか、少年は溜め息を吐き出し、「それなら…」と言いながらポケットに手をつ込み、そして“何か”を取り出す。

少年

「これをあげるってのは、どう？」

フェイト

「！」

少年の手の平に乗るその“何か”を見たフェイトは、目を大きく見開かせた。

ルビーのように綺麗な赤い瞳が見つめるのは、菱形の青く煌く小さな宝石。願いを叶えてくれるロストログア。この地で、何が何でも集めなければならぬもの。

アルフ

「ジュエル、シード…」

少年

「まあこれは君たちが今日回収しようとしていたやつだけだね」

呆然と言うアルフの後に、少年は困ったような苦笑を浮かべて補

足をする。

フェイト

「……………正気？」

どうにか冷静さを保ったフェイトは、警戒の眼差しを向けたまま数秒の間を置いて慎重に口を開く。

少年

「正気だよ」

フェイトと違い、間を置かずに言う少年。即答だった。

フェイト

「それを私たちがどうするのかも分からないの？」

少年

「君たちはこれを悪いことに使ったりする風には見えないから」

その言葉に、微笑みに、フェイトは戸惑った。

まだ会って間もないのに、会話もほとんど交わしていないのに、この少年はどうしてそんなことが言えるのだろうか。どうして、そんな表情を向けられるのだろうか。どうして……………こんなにも優しく

してくれるのだろうか…。

——彼にとって自分は赤の他人。“敵”であるはずなのに…。

様々な疑問がフェイトの頭を駆け巡る中、少年は「それに…」と言い彼女の手を優しく取る。

少年

「君にはこれが必要なんだよね？」

少年の手の平から自分の手の平へと乗せられる小さな宝石。フェイトは何も言わずに、己の左手に乗るそれを見つめていた。

少年はそんなフェイトを見て、再び微笑むとゆっくりと踵を返して玄関へと向かう。

フェイト

「もし…！」

フェイトの少し強い口調の呼びかけに、リビングを出ようとしていた少年の背中が止まる。

フェイト

「もし、私があなただの思うような人じゃなかったら？これを悪いことに使ったら？そう、思わないの？」

いつもより早口で捲くし立てられた言葉。足を止め、しばし沈黙するその背中をフェイトは見つめた。

少年

「考えないと言え、嘘になる。だけど、もしそんなことが起こったら僕たちが止めればいい。助ければいい。それが、僕たちの仕事だから」

フェイト

「もう一つ。―――どうして、私を助けたの…?」

二度目の問いかけに少年はゆっくりと振り向き、今度はしっかりと間を置かずに応えた。

少年

「SOSが聞こえた」

その答えを残して、少年はリビングから……いや、このマンションから去って行った。

アルフ

「変な奴…」

フェイト

「うん。そうだね」

アルフにそんな相槌を返しながら、フェイトは少年の背が消えたリビングのドアをただじっと見つめていた。

——SOSが聞こえた。

その言葉と少年の声を思い返しながら、フェイトは手の平に乗る宝石を両手で包む込むようにして無意識にぎゅっと握り締めていた。

小さな手の中に納められた小さな宝石は、微かな、しかし温かなぬくもりと共に、その青い光を放ちながら静かに煌いていた……。

〈Episode 13…キーワードはフレンチトーストなの?〉(後書き)

はい、という訳で十三話目を無事に更新しました。COMAです。

今日はちょっと用がありまして有楽町まで出向いている現在。

その辺のファーストフード店でPCしてました。

いやー家と違って騒がしいのなんのって。まあ何故か執筆しやすかったんですが…(笑)

ちなみにみ何故、出不精の私めが家を出て日比谷に来ているかと言いますと…:クラシックのコンサートを見に(聞きに?) 日比谷公会堂に来たわけでした。

気分転換にいいかなーと思って珍しく友人の誘いにのったしだいでもあります。

これで、新たな創作意欲が出ればいいなーなどと考えております。

感想ももらいましたし、期待には応えねばなりませんね。

数少ない読者様に感謝し、これからも頑張りたいと思います!

しかし、感想の返事ってどうやればいいのかな…(汗)

<サクラ>

まあ初心者丸出しの作者は放っという次回予告をどうぞ。

<くなのは>

いつものように特訓の日々を送る私たち。

そんなある日、私たちはひょんなことからサクラくんの過去について知ります。

いつもお世話になっているサクラくんの過去とは一体…？

次回、魔法少女リリカルなのは～Prologue～

『Episode 14…語られる過去なの』

リリカルマジカル、頑張ります！

——収録後……

＜なのは＞

は～今日も一日平和だったな～（ドアを開ける）

——パン！パパン！パン！（クラッカーの音）

＜なのは＞

！？な、何なの？！

＜なのは出演全メンバー＞

高町なのはさん！お誕生日おめでとー！ー！ー！！

＜なのは＞

……………え？これって…（おめでとようと書かれた垂れ幕を見る）

＜クロノ＞

何を固まってるんだ？今日は君の誕生日だろう？

＜サクラ＞

だから、皆でお祝いしようってね。

<フェイト>

お誕生日おめでとう。なのは♪

<はやて>

まあ私はまだ話に出てきてへんけど、お祝いだけでもせんな♪

<全メンバー>

おめでとー！ー！！！！

<なのは>

み、皆…（涙ぐむなのは）

<エイミィ>

さあ皆！盛大にやるよー！！

<全メンバー>

おおおおお！！！！

<COMA>

と、いうわけで……本当にお誕生日おめでとうございます！！

—完—



## 『Episode 14…語られる過去なの』

なのはとユーノがアースラに乗船して早十日。特訓に関してはなのはの持つ才能が発揮され、順調に成果を上げているが、その一方で局が今までに回収した＜ジュエルシード＞は計三つを微妙な数字だった。

現在、搜索範囲を地上から海の方まで広げて探しているものの、これと言って目ぼしい反応は見当たらない。

この事実には、アースラスタッフの皆が皆、多少なりの焦燥感を覚えていっているのは言うまでもなかった。

そんな幸先が怪しい中でも訓練室では毎日のように特訓が行われているわけなのだが、今日は何故かいつものような激しい爆発音等は聞こえてこない。

サクラ

「そう。自分を中心に大気中に漂う魔力を寄せ集めて、それをパズルみたいに新しく組み合わせる様をイメージするんだ。漠然とじゃなくて、できるだけ細かく鮮明に」

静まり返った訓練室内に響くサクラの諭すような声。そして、その隣に立ち集中した表情を見せるなのは。

なのはの手に持つ魔導杖、レイジングハートの先端には桜色の球体があり、そこへ向かって周囲から同色の燦光が流星のように細い

線を引いて集う。

時間を経つに連れてだんだんと肥大していく桜色のスフィア。その制御を怠らないように、なのはの集中力がより一層高まり、それに比例して表情に陰しさが現れる。

サクラ

「これ以上キツイと思ったら、すぐに解放するんだ。無理に続けようとすれば制御が利かずに暴発する恐れがあるから。ただし、放つときは一直線。拡散させちゃダメだ」

なのはの小さな表情の変化に気付いたサクラが念を押したまさにそのとき、

クロノ

「やってるみたいだな」

なのは

「——あ！」

訓練室に入ってきた第三者クロノの、なのはにしてみれば突然の聲に集中力が途切れたのか、杖先に集められていた魔力が術者なのはの意思なくして放たれた。

それでもサクラの注意通り一直線に放たれているのは、流石は魔法の才がある者、と言ったところか。

解き放たれた桜色の魔力は、今、この場に來たばかりのクロノの頬ぎりぎりを掠め、その後ろにある壁へと凄まじい衝突音と共に激突した。

無論、非殺傷設定なのでそれらにダメージは一切ないが、それでもその場にいる全員の額に冷や汗が出る。特にクロノは。

クロノ

「……………君は僕に何か恨みでもあるのか？」

なのは

「ぎ、ぎぎぎぎめんさい！ つい、うっかり…」

ユーノ

「うっかりって…」

冷や汗を一筋流しながら頬をひくつかせて言うクロノに、慌てて頭を下げて謝罪するなのは。

それを傍から見ていたユーノは思わずツツコミをいれ、サクラはただただ苦笑。その二人の表情も少々引きつり気味になっているのは言うまでもないことだ。

まあなのはも故意でやったわけではないと皆わかってはいるのだが、だとしても流石にあれの直撃を喰らうのは笑えない。

それほどの威力があったことを先の衝突音が物語っている。

クロノ

「……まあ順調なのに変わりはないか……。模擬戦の方はもういいのか？」

サクラ

「うん、基礎固めは大方できたから今は応用をちょっとね」

クロノの溜め息交じりの言葉に、サクラは苦笑いを浮かべたまま頷き答える。

サクラ

「でも、たった数日でここまで行くとは思ってなかったから、本当に凄いなと思うよ。模擬戦をやらせたら、ウチの局員よりも実力は上なんじゃないかな」

クロノ

「なら、勝算はありそうか？」

その言葉に、クロノだけではなくのはとユーノの視線もサクラへと向く。

クロノの言う「勝算」とはもちろん、“黒衣の少女”……フェイト・テストアロッサのことだ。ここにいる誰もがそのことはわかっている。

一つ息を吐いてからサクラは言葉を選ぶようにゆっくりと口を開く。

サクラ

「……あるにはある。だけど、現段階では高町さんのコンディションが最高だったとしても良くて五分五分だ」

不安そうな瞳を向けるなのはに気付いていながらも、サクラはありのままの事実を述べた。

それを聞き、クロノは「そうか…」と表情を僅かに厳しくさせ、ユーノも落胆気味に視線を下に落とす。

なのはも二人と同じように目を伏せ、手に持っている杖をただ握り締めていた。

やはり、たかが数日の特訓では彼女に並ぶこともできないのか…。表情がそう物語っていた。

そんな三人を見ながらサクラは「でも」と続ける。

サクラ

「まあこれはあくまでも二人の総合比較だから、勝敗なんて実際に戦ってみないとわからない。それに一応だけど秘策も考えてある」

クロノ

「秘策？何だそれは」

サクラ

「それはまだ練習中だから、本番のお楽しみってことで」

どこか楽しそうな雰囲気を持つ笑顔でそう返すサクラに対し、クロノは怪訝そうに眉をひそめさせた。

それからサクラは後ろでまだ顔を伏せ気味にして暗い雰囲気のなのはの肩にポンと軽く手を置く。

サクラ

「とりあえずは残っている時間を目一杯使って頑張ろう。あの子に君の想いを伝えるために」

そう。タイムリミットはもうあと僅かかもしれないが、まだ時間は残っている。それまでに少しでも彼女と渡り合えるように目一杯頑張ればいい。

自分が今できることを精一杯、少しでもこの気持ち、言葉が、  
あなた彼女に届くように――。

だからこそ、なのはは俯いていた顔を上げ、

なのは

「うん！」

笑顔でそう頷くのであった。

あれから更にクロノも交えた軽い模擬戦――軽いと言うには少し語弊があるものだったが――を行い、時刻はもうすぐ昼時。訓練室にいた四人は、なのはの「一緒に食べよう」発言により、そのまま食堂へ向かい、昼食を取ることにした。

食堂には少し早めの昼食ということもあってか、妙なところで曲がっている横長のテーブルに座っている人はまちまちだった。

その中の一角に座り、取り留めのない会話を交わしていると、ふとなのはが思いついたように口を開く。

なのは

「ユーノくんも魔法を教えてくれるの上手だったけど、サクラくんも凄く上手だね」

ユーノ

「確かに。魔法を使うときのイメージとかそんなの考えたこともな

いよ」

そう言う二人に対し、サクラは「ああ」と困ったように苦笑する。

サクラ

「僕は魔導師っていう職には不向きみたいでね、常に意識してないと魔法の発動が上手くできないんだ。だから、できるだけ意識しやすいようにイメージを基本にしてるんだよ」

なのは

「そうなんだ」

サクラ

「って言ってもこれを考えたのは僕じゃなくて、僕の師匠なんだけど」

ユーノ

「へえ、サクラにもやっぱり師匠とかいるんだ？」

サクラ

「まあ、ね」

なのは

「誰々？」

興味津々と言ったふうにし身を乗り出して聞いてくるなのはにサクラは再度困ったように苦笑をした。



サクラ

「一人は、今、目の前にいるよ」

なのは

「え、それってもしかして――クロノくん？」

その言葉に、驚いた表情で言ったのはもちろん、ユーノも、向かいの席で一人黙々と食事をしているクロノへと視線を向ける。

クロノはその視線を軽く受け流しながらナプキンで口を拭く。あまり会話に参加していなかったためか、すでに食事を済ませてしまったらしい。

クロノ

「別に師弟なんて間柄でもないさ。強いて言うなら模擬戦仲間、か？」

サクラ

「まあ確かにそっちの方が近い感じはするけど…、僕よりクロノの方が技術面も実戦経験も上だから、色々と学ぶことは多いよ」

謙遜の言葉を述べるサクラだったが、対するクロノはその言葉に小さな笑みを浮かべてサクラを見る。

どこか意地悪さを感じさせるその笑みは、この数日間で見してきた

クロノという存在からはまったく予想できないものだったので、少々驚くのはとユーノ。

クロノ

「まあどうしてもって言うなら愚弟として寛大に迎えてやるが？」

サクラ

「冗談。クロノに弟子入りなんかした日にはロクなことにならないのが目に見えてるよ。主に女性方面で」

大げさに肩をすくめさせて溜め息と共にそう言うサクラ。こちらもどこかからかい口調だ。

対するクロノはその言葉が引っ掛かったのか、片眉が僅かに持ち上がり、笑みが消える。

クロノ

「どういう意味だ」

サクラ

「女の人にまったく太刀打ちできないヘタレになったら困るってことだよ」

クロノ

「そう言うお前こそ、艦長やエイミィに弄られてばかりだろう？」

サクラ

「それはお互い様だよ。まあ実際のところはクロノの方が圧倒的に

回数多いだろうね。クロノむつつりだし」

クロノ

「誰がむつつりだ、誰が。それならお前はミニマムメイデンだ」

サクラ

「何それ」

クロノ

「最小乙女」

サクラ

「……………喧嘩売ってる？」

徐々にヒートアップしていく二人の口論。互いの間には小さな火花が散っている。

しかし、それは一種のじゃれ合いのようなもの。サクラもクロノも決して本気で互いを罵り合っているわけではない……と思う……。いや、思いたい。

そんな二人の様子を見て、なのはは苦笑する。

なのは

「にやははは、二人とも仲良しさんなんだね。ちょっと羨ましいな」

ユーノ

「どうして？」

少し羨ましそうに言うなのはに不思議そうな表情で返すユーノ。

その二つの声で口喧嘩のボルテージも下がり、今まで睨み合っていたサクラとクロノも一時休戦し、なのはへと視線をやる。

なのは

「私にもお兄ちゃんとお姉ちゃんが一人ずついるんだけど、二人ともちょっとだけ年が離れているでしょ？」

ユーノ

「確か、お兄さんが大学生でお姉さんの方が高校生……だっけ」

なのは

「うん。だから、喧嘩もあんまりしないし、もし喧嘩してもなのはが一方的に怒っちゃうだけだから……。サクラちゃんとクロノくんのとちよつと羨ましいなって」

ユーノ

「そっか……」

クロノ

「ちよつと待て、君たち。一応言っておくが、僕らもそんなにしょっちゅう口論しているわけじゃないぞ」

当人らをそっちのけでどこかしんみりとした雰囲気を漂わせるなのはとユーノを見て、クロノは少し複雑そうな表情をしながらも訂

正をいれ、サクラは苦笑いをするしかなかった。

言いたい事を言い合える仲。

喧嘩をするときもあるが、それも歴とした仲の良い証。互いを心から認め合っているからこそできること。

だからと言ってなのはの兄弟が、なのはのことを認めていないということではないし、仲が悪いかと言われれば「NO」と即答するだろう。

しかし、同じ目線で見ているかと問われれば、答えに詰まる。

それは二人にとって“高町なのは”という存在が自分たちよりも年下であり、妹だからだ。

それも十も離れている妹となれば、張り合うなど大人気ないし、例え意見が衝突してもよっぽどのことがない限りは譲るなり我慢するなりするのだろう。

故になのはの目にはサクラとクロノの関係が羨ましく映ったのかもしれない。いや、そう映ったのだろう。

そのせいか、なのはが再び羨ましそうな声で言う。

なのは

「それでもいいなあ。年の近い“兄弟”って」

しかし、何の他愛もないその一言は一瞬だけ：そう、ほんの一瞬だけ兄弟の表情を強張らせる。二つの双眸が同時に揺れた気がした。それを当然の如く不思議に思ったのはは首を傾げさせる。

なのは

「あれ？サクラくんとクロノくんって“兄弟”…なんだよね？」

クロノ

「あ、ああ」

サクラ

「そ、そうだよ」

なのはの疑念の声に我に返ったように慌てて答える二人。その表情はまだどこか強張っていて、声にも瞳にも隠しきれない動揺があった。

二人の不自然な反応の理由がわからないのはは不思議そうに首を傾げ、ユーノも同様に首を捻る。

分かることはただ一つ。やはり何故だかは分からないが、サクラとクロノの間に妙に気まずい雰囲気が流れていることだ。

何か不味いことを言ってしまったのかもしれない…。不安に思ったのはが口を開こうとしたそのとき、

エイミー

『お食事のところ割り込みゴメンねー』

クロノの目前に小型のモニターが現れ、そこにエイミーの顔をが映し出された。

突然の通信のおかげか、サクラとクロノの間にあった気まずい雰囲気は一気に霧散し、二人の表情は仕事時のそれに切り替わっていた。

クロノ

「どうした？エイミー」

表情を変えぬままモニターに映るエイミーに淡々とした事務的な口調で訊ねるクロノ。

モニターのエイミーは「いや、ちょっとね」と言いながらクロノに用件を言い始める。どうやら用があるのはクロノのみらしい。

クロノ

「わかった。昼食はもう済ませたからすぐ行く」

用件を聞き終わりその言葉と共に席を立つクロノに「了解」という言葉を残して、空中にあった通信モニターは消えた。

クロノ

「すまないな。先に席を外させてもらう」

なのは

「ううん、気にしないで」

申し訳なさそうに眉を下げて謝るクロノになのはは首を横に振って笑顔でそう返した。

サクラ

「クロノ」

トレイを持ってその場を後にしようとする背中にサクラが声をかけ、クロノが半身になって振り返る。

サクラ

「僕も後から行くから」

その言葉にクロノは「ああ」と短く返事をし、トレイを食器返却カウンターに置いてから食堂を出て行った。

それを見送っていたサクラはその姿が見えなくなると同時に無意識に深い溜め息を吐き出した。



なのは

「サクラくん？どうしたの？」

サクラ

「ううん、何でもないよ」

なのはの問いかけに苦笑を浮かべながら答えるサクラ。しかし、  
なのはにはその表情がどこか寂しそうなものに見えてならなかった。

なのは

「あの…」

サクラ

「？」

なのはのおずおずとした態度にサクラは不思議そうに首を傾げさ  
せる。

なのは

「ごめんなさい…」

サクラ

「え？どうして？」

なのは

「その、サクラさんとクロノくん様がおかしかったから……。私が何か言っちゃいけないこと言ったのかなって……」

それだけで何を言わんとしているのか察したサクラは「あー」と無意味な声を漏らす。

サクラ

「わかった？」

俯きがちにコクリと小さく頷いたのはを見て、サクラは「参ったな」と言って困ったように眉を下げて苦笑すると、所在なさに頬を掻く。

なのははそれ以上何も言わず、隣に座っているユーノもどうしていいか分からないので口を噤んだまま。サクラも虚空へ視線を向けてただ黙っているだけだった。

サクラ

「僕はね、施設育ちなんだ」

なのは

「え？」

そして、しばしの沈黙の後にポツリと漏らされた言葉になのはが顔を上げ、二人の目が合う。

サクラ

「僕の両親は早くに亡くなったらしくて、身寄りのなかった僕は唯一の肉親である姉さんと一緒に施設に保護されてそこで育ったんだ。八歳のときまではね」

なのは

「八歳のときまで？」

鸚鵡返しにして訊ねるなのは「そう」と頷きながら続ける。

サクラ

「僕が八歳のとき、酷い震災にあったね。僕がいた施設は周りを山に囲まれてたのもあって全壊したらしんだ。僕は気を失っていたからそのときは全然覚えてないんだけど、偶然にも助かった僕は救助にきた管理局員に保護された。その局員がクロノだったんだ」

当時のことを思い出しているのか、サクラはなのはたちに目を向けていながらもその先……どこかずっと遠くを見つめているようだった。

サクラ

「両親もいない。頼れる親戚もいない。そんな身寄りのない僕を養子として迎え入れてくれたのが、救助に来てくれた艦船の艦長……」

ンディさんなんだ」

ユーノ

「じゃあ、その…、クロノとリンディさんは…」

サクラ

「血縁関係はない。元を辿ればまったくの他人同士だよ」

言い辛そうにしているユーノの意を酌んで、サクラがその後を引き継ぎ頷く。

なのは

「あの…、サクラくんのお姉さんは…」

なのはのその言葉にサクラの琥珀の双眸が揺らいだ。今まで遠くを見つめていた視線を上げて虚空へと向けられる。

それは一点を捉えてはいるが、まるで、何かを探し求めて当てもなくふらふらと彷徨っているような、そんな風になのはとユーノには見えた。

そして、一呼吸を置いてからサクラは――

サクラ

「亡くなったよ」

なのは

「……っ」

ただ一言、短くそう言った。

不自然なほどに平板なその口調はサクラが己の感情を押し殺しているということが分かる。その声は震えているようにも聞こえた。

サクラ

「遺体は見つからなかったんだけど、変わりにこれが見つかったんだ」

そう言って、サクラは制服の下から何かを取り出して首から外すとテーブルの上に置く。

なのは

「ハーモニカ……？」

テーブルの上で霞んだ黄金色の輝きを放つそれは、シンプルな彫り細工が施された綺麗なハーモニカだった。

古い物なのか、所々に傷があったり塗装が剥がれていたりするが、それでもそのハーモニカは人を魅了する何かを秘めているような、そんな気がした。

サクラ

「このハーモニカは姉さんのなんだ。だから、これは姉さんの形見みたいなものかな」

そう言うときサクラはハーモニカを首に下げ直して大切そうに制服の下へとしまふ。そして、暗い表情をするのはとユーノを見て困ったように眉を下げ、苦笑した。

サクラ

「ごめんね、何か嫌な気分になんて。君たちに話すようなことじゃないのに」

なのは

「そんなこと……！」

自嘲染みたサクラの言い方に、なのはは思わず席を立ち上がり否定の声を上げようとするが、それを遮るかのようにして、

——ヴィーッ！ヴィーッ！ヴィーッ！

けたたましい警報音が食堂に……いや、艦内全体に鳴り響いた。次いで、海鳴市の海上にて大型の魔力反応が感知されたとの情報が艦

内アナウンスで流れる。

サクラ

「ちょうど良いタイミング、かな？」

警報音が聞こえるや否や席を立ち上がっていたサクラはそう言っ  
て笑う。その笑顔には最早先ほどのような寂しげな雰囲気は見られ  
なかった。

そして、その表情は瞬時に仕事時のそれへと切り替わる。

サクラ

「行こう。高町さん、ユーノ」

なのは

「うん…！」

ユーノ

「了解」

サクラの声になのはとユーノも沈んでいた思考回路を切り替えて  
真剣な表情で頷きを返し、そして三人は警報音が鳴り響く中をブリ  
ッジを目指して駆け出すのであった……。

## 〈Episode 14…語られる過去なの〉（後書き）

えー、という訳で無事に十四話目を更新しました。COMAです。

そろそろ春休みも終わりに近づき、もうすぐ新学期。新学年。

受験も控えてますし、あんまりおちゃらけてられない一年になりそうです（汗）

とりあえずは春休みの宿題を片付けるところから始めんと…orz

我ながら亡くなった姉の形見がハーモニカって随分とベターな設定だなあと執筆を終わってから思いました。

かと言って他に何か適切なものがないか思い浮かぶわけでもなく、結局そのままハーモニカで押し通すと言う…（苦笑）

さて、これから先は勢い余って潰した前作の域に入ります。

今回は以前に潰した作品のときよりも暇な時間がなくなってしまう時期ですが、何とか繋げてしっかりと簡潔させたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

さあ無印編に新たに加えられたオリキャラの少年魔導師サクラと、ラピスという名前のみが知れている謎の未確認生命体（え？）はこの先どのように物語に関わっていくのか！そして、その存在が物語にどう影響するのか！

それでは次回予告をどうぞ！

＜なのは＞

鳴り響く甲高い警報音。明滅を繰り返す赤い光。そして、突如とし



て海上に現れた大型の魔力反応。

あなたに伝えたい言葉がある。届けたい想いがある。

その気持ちを胸にブリッジへと駆け出した私たちが見たものは…!?

次回、魔法少女リリカルなのは～Prologue～

『Episode 15…まさかの独断行動なの!』

リリカルマジカル、頑張ります!

〈Episode 15..まさかの独断行動なの!〉

クロノ

「馬鹿な! 自滅する気か!?!」

艦内の廊下を全速力で駆け抜け、ようやくブリッジへと辿り着いた三人がまず耳にしたのは、クロノの驚愕による声だった。

喧騒に包まれたブリッジ。

スタッフたちの現状報告が飛び交うその上に浮かぶ大型のメインモニターに映るのは、高々とした津波を上げて暴れ狂う大時化の海と……

なのは

「フェイトちゃん!」

豊かな金髪と特徴的な赤い瞳を持ち、その華奢な体躯に黒衣を纏った、まだ幼さの残る顔立ちをした少女……フェイト・テストアロツサだった。

モニターに映る光景と、その只中にいる彼女の姿を見たのはが悲鳴に近い声を上げる。

サクラ

「クロノ、状況はどうなってる？」

クロノ

「どうもこうもあるか…！あんなの個人が出せる魔力の範囲を超えている！滅茶苦茶だ…！」

あまりの出来事に動揺を隠し切れないクロノが誰にでもなくモニターに向かい、叫ぶ。

リンディ

「恐らく…あの子達も私たちと同じように残りの＜ジュエルシード＞が海中にあると考えたんでしょうね…。だけど、あの広い海から位置を特定するには個人の力だけではかなりの時間を要するわ。だから―――」

サクラ

「一番確実で手早く済ますことのできる方法…、電気系の魔力流を海に放って海中に沈む＜ジュエルシード＞の強制発動を促し、向こうから自らの位置を教えさせる。……そんなところですか」

ユーノ

「そ、そんな無茶な…」

リンディの説明で大方を把握したサクラが続ける言葉に、ユーノが愕然とする。

落下範囲内とは言え、海は広い。海中全体に強制発動ができるほどの魔力が行き渡るような魔法を使用すれば当然、己の魔力の大半を持っていかれることは必至。

それに加えて自らが暴走させた数個のロストログアを一つ残らず封印するなど、できるわけがない。

誰が考えても分かる。そんなことは無茶を通り越した“無謀”でしかない。

にも関わらずフェイトはそれを行った。

決して、自暴自棄になってリスク云々の想定を欠いていたわけではない。自らに降りかかる危険を承知の上で行ったのだ。

故にその予想外の事態に対してクロノが取り乱すのも、ユーノが絶句するのも無理もないことだった。

なのは

「あ、あのっ！私急いで現場に行きます！！」

なのはが艦長席に駆け寄り、名乗り出る。その顔は強張り、表情には焦りの色が浮かんでいた。

己自身が招いた結果とは言え、フェイトのことを気にかけているなのはとしては、彼女がどんなに危険な目に合っているのかわかっている以上、助けずにはいられないのだろう。

宣言するや否やその場で踵を返し、転送ポートへと駆け出そうとする。が、

クロノ

「いや、その必要はないよ」

その言葉になのはの足が止まった。同時に振り返り、「何故」という表情をクロノへと向ける。このままではフェイトの身が危ないというのに、と。

だが、その表情に返された言葉は彼女にとっては信じられないものだった。

クロノ

「このまま放っておけば彼女は自滅する。僕らはそれを待ってればいい」

発せられた無情な台詞になのはは大きく目を見開いた。

思いも寄らなかった言葉に呆然とするのはに向けて、それは更に続けられた。

クロノ

「自滅したところを捕獲。もしくは、消耗したところを叩いてから捕獲。＜ジュエルシード＞は、その後に回収すれば済むだけの話だ。

君が今行く必要はないよ」

なのは

「でも、このままじゃフェイトちゃんが…!」

クロノ

「これは彼女自身が招いたことだ。自業自得だよ」

なのは

「そんな…! フェイトちゃんが危ない目に合ってるのに、それなのに何もしないで見てるなんて…、そんなの、できないよ!」

あまりにも酷すぎるクロノの言い分に耐え切れず、なのはが抗議の声を上げる。

しかし、誰一人としてその声に応えてくれる者はおらず、それどころかクロノの一声によってフェイトの自滅を想定した捕獲準備が始められた。

その様子を見たなのはは我慢ならないともう一度抗議の声を上げようとするが、

リンディ

「なのはさん」

まるでそうなることを予期していたかのように、リンディの静かな声音がそれを妨げた。

そして、それは途切れることなく続けられる。

リンディ

「私たちはね、常に最善の選択をしなければならないの。大げさに聞こえるかもしれないけど、私たちの選択一つでその世界の運命を左右することだってあるわ」

そう言って、リンディは硬く目を閉じて腕組をする。

リンディの落ち着いたその口調は、自身が何度もこのような場面に立ち会い、そして、その度に決断を下してきたことを物語っているに他ならないことをなのはに悟らせた。

艦長席に座るリンディの後姿からは、艦長としての経験とそれが生み出す貫禄があった。

リンディ

「残酷に見えるかもしれない……。だけど、わかって欲しいの。これが今の私たちがとれる最善の選択であり、“現実”であるということを」

その言葉になのははそれ以上、口を開くことができなくなってしまった。

“時空管理局”。それは次元の平和と秩序を守るための法を司る

正義の代行機関。だが、一言に“正義”と言っても、彼らが行うことは決して慈善事業などではない。

彼らがすべきことはあくまでも平行する次元世界の平和と秩序の維持であり、それが彼らの仕事。

平和を脅かそうとするモノがあれば制裁し、秩序を乱そうとするモノがあれば粛清する。

そして、今彼らが目の前にしているのは単なる“幼い少女”ではなく、大規模次元犯罪に加担する“犯罪者”である。手を緩めるはずがない。

なのははようやく自分が“時空管理局”という組織の本質を履き違えていたことに気付いた。

彼らには“世界”という守るべき大きなモノがある。故に、自分が何を言おうと喚こうと答えは変わらないということに――。

なのは

「っ……」

それはなのはとてわからないことではない。一人と世界。その二つを天秤にかければどちらが“重たい”かなんて考えるまでもないことだ。

だからこそ、それがわかるからこそ、なのはは反論することができなかった。



助けたい。そう思うのに、今の自分はどこまでも無力で。

彼女の悲しみを、苦しみを取り除きたい。そう思うのに、今の自分は彼女の側に行くことすらできない。

———こんなにも、近くにいるのに……！

心の中を渦巻く様々な想い。今にも溢れ出してしまいそうなその感情に、なのはがきつく両手を握り締めた、そのとき——

《行って！》

頭の中に突然響き渡る声。聞き慣れたその声になのはは顔を上げ、後方を振り返る。

《僕がここの簡易ポートを開くから、なのははあの子の所へ行っ  
てあげて》

後方に立つユーノを視界に捉えるのと、再び彼の声がなのはの頭の中で木霊するのがほぼ同時だった。

目が合う。ユーノの表情はいつもと変わらない穏やかで、落ち着  
いたものだった。

しかし、なのはは躊躇の色を顔に浮かべ、ユーノを見つめる。

なのは

《でも、私があの子と…フェイトちゃんと話をしたいのはユーノく  
んとは全然関係ないんだよ…？》

ユーノからの申し出は、なのはにしてみれば願ってもないことである。だがしかし、なのはには自分の私情にユーノを巻き込む気は毛頭ない。

元々ユーノの目的は自身が発掘し、この世界に散らばってしまったロストログアの欠片全てを回収し、然るべき場所にきちんと保管することだ。

クロノの言うとおりにしてこのままフェイトの自滅を待てば、残る<ジュエルシード>も、フェイトが所持している<ジュエルシード>も手に入る。

それは即ち、彼の悲願が叶うも同然。

——そのせつかくの機会を、己の我侭で潰してしまうわけには…。

しかし、ユーノはなのはの躊躇いに小さく首を横に振った。

ユーノ

《関係なくなてないよ。なのはは僕のことを助けてくれた。危険だってわかってるはずなのに、本当はすごく怖いはずなのに、一緒に戦ってくれた。そのことについては、すごく感謝してるし、何より嬉しかった》

そう言ってユーノは微笑み、「だから」と続ける。

ユーノ

《関係ないなんて言わないで。なのはは今までずっと僕に力を貸してくれた。だったら、僕だってなのはが困ってるときに力になりたい。頼って欲しいんだ。あの日、なのはが僕にそうしてくれたみたい……》

なのは

《ユーノ、くん……》

なのはの脳裏に数週間前のことがフラッシュバックする。

夢を見たあの日。親友たちと塾へ向かう途中の林道で見つけた傷だらけの小さなフェレット……。それが、全ての始まりだった。

今日の前にいるユーノ・スクライアという人物をきっかけに魔法を知り、世界を知り、色々なことがあり、その中でたくさんの方と“出会い”に出会った。

それは、改めて思い返してみるともう随分と前の出来事のような

……そんな気がした。そして、

ユーノ

《だから行って！なのは！》

その声を合図に、なのはは駆け出していた。

迷わず目指すその先にはユーノの更に後方に設置されている簡易転送ポート。それが、ゆっくりと淡い光を放ち出す。

クロノ

「君たち！！」

異変に気付いたクロノの張り上げた声が聞こえるが、関係ない。何故なら、なのはの姿はすでに転送ポートの中なのだから。

そして、その先に行かせないと言わんばかりにユーノが立つ。

リンディがガタン！という音をたてて席から立ち上がり、ブリッジにいるスタッフたちの顔が一斉に簡易転送ポートに向けられる。

ユーノを除くその場にいる全員が、淡い光の中に立つ少女の姿をその目に映した。

その視線を一つ残らず真っ向から受け止めて、なのはは一度だけ大きく深呼吸をすると、

なのは

「ごめんなさい…。高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります…！」

皆の耳に凜然とした声を残し、その姿を光の粒子と化して消えていった。

異様な静寂に包まれるブリッジ。一瞬の出来事に誰もが啞然としていた。

その中で一人、クロノが「くそっ！」という悪態を吐いて転送ポートの前に立つユーノへと荒々しく近付き、その胸倉を乱暴に突き上げる。

クロノ

「君は自分が何をしたのかわかっているのか…！」

クロノの怒号が静寂を破り、ブリッジにけたたましく反響する。

クロノ

「何故こんなことをした！あんな状況下に彼女一人を放り出して、一体何になるって言うんだ…！」

ユーノ

「……………」

サクラ

「クロノ、落ち着いて」

何も言わずにただ黙っているユーノを一方的に怒鳴りつけるクロノ。そんな二人の様子を執り成そうとサクラがクロノを宥める。

クロノ

「これが落ち着いていられるか！彼女は民間人なんだぞ！？もしものことがあ……」「落ち着いて下さい！ハラオウン執務官！！」……っ！」

張り上げられたサクラの声に、スタッフの何人かがビクリと肩を震わせた。クロノも聞き慣れない義弟の鋭い声にたじろいだような表情を浮かべる。

再びブリッジが水を打ったように静まり返り、視線が一点<sup>サクラ</sup>へと集められた。

妙な緊張が漂う中、サクラはクロノをじっと見つめたまま表情を変えずにゆっくりと口を開く。

サクラ

「確かに彼らの行動は咎めるべきものです。…ですが、今は起きてしまった事態に何かしらの手を打つことが先決なのではありません

か？」

淡々とした事務的な口調と、先とは打って変わった落ち着きのあ  
る冷静な声。

そのおかげかクロノも徐々に落ち着きを取り戻していったようで、  
力が抜けたようにユーノの胸倉をつかんでいた腕が下ろされる。

クロノ

「すまない……」

サクラ

「うん」

心底すまなさそうな表情で呟くように言うクロノにサクラは小さ  
く頷きを返した後、その視線を先程から一度も口を開かないユーノ  
へと向ける。

サクラ

「まったく……。君も温和そうに見えて意外とやってくれるね」

ユーノ

「……………」

深い溜め息を吐き出しながら呆れ顔で言うサクラに、ユーノは何

も返さず黙ったままだった。

それを見たサクラは再度深い溜め息を吐き出す。

サクラ

「まあお咎め云々は後にして……艦長」

言葉と共にサクラはそれまで何も言わずにこちらの様子を静観していたリンディへと視線を映す。

サクラ

「僕を現場に行かせて下さい。あの状況下に民間人である彼女たちをこのまま置いておくのはあまりにも危険です。それに、この件については監督役である僕にも責任があります」

サクラの言葉にリンディは腕を組んで思案するような表情をし、数瞬の後に閉じていた目を開けると、真剣な顔で深く頷く。

リンディ

「いいでしょう。ただし、責任がある以上それ相応の働きをしてもらいますからね？」

サクラ

「わかりました」



承諾の言葉を受け取ったリンディはすぐさまスタッフの一人に簡易転送ポートを開くよう指示を出す。

その様子を横目にサクラは、転送ポートの前で俯き、立ち尽くしているユーノへと歩み寄るとその肩に軽く手を置く。

サクラ

「行こう、ユーノ」

ユーノ

「え？」

クロノ

「な！」

肩に置かれた手とも思いも寄らない言葉にユーノの顔が上がる。その表情は驚きに満ちたものだった。

一方でその発言に納得がいかないクロノは抗議の声を上げる。

クロノ

「ちょっと待て、何故ユーノを連れて行く必要がある！」

サクラ

「僕の実力じゃ、あの中を一人で渡るのはきつい。だから、ユーノにはそのサポートをお願いするんだよ」

クロノ

「それなら僕が行けばいいだろう！」

そう言うクロノに対し、サクラは頭を振る。

サクラ

「それはダメだよ。僕とクロノが同時にいたら有事の際に対処が取れなくなる」

クロノ

「だが…！」

サクラの言い分にか食い下がろうとするクロノはかなり必死な様子だった。

恐らく、欠片とは言えロストログニア六つが暴走する超危険地帯に弟を行かせるのはどうにも我慢ならない、という兄の心情なのだろう。

それをアシストするのが、ユーノという点もどこか気に食わないのかもしれないが…。

ともかく、本人は気付いていないようだが、その表情に浮かぶのは“心配”の一言に限られている。

その気持ちはサクラにとって嬉しくはあるのだろうが、現状が現

状なので、そんなことを言っている余裕などない。時間は刻一刻と過ぎていつているのだ。

故にサクラは強引に「それに」と言葉を続けさせる。

サクラ

「切り札は最後まで取っておくもの、ですよ？ ハラ・オウン・執務官殿？」

クロノ

「ぐ……」

意図的に強調させたサクラの丁寧語にクロノは言い返す言葉が見つからず、口を噤まざるを得なかった。

いかにも悔しそうな表情をこちらに向けてくるクロノにサクラは苦笑する。

サクラ

「僕だってクロノや師匠せんせいに嫌ってほど鍛えられたんだから、そこまです柔じゃないよ。それでも無理そうだったら、ちゃんと救援要請するから」

クロノ

「……………わかった」

最後の一押しに未だ不機嫌そうな表情で渋々納得をするクロノにサクラは再度苦笑いをしつつ、ユーノに「行こう」と声をかけ、転送ポートに乗る。

そして、サクラとユーノの二人の姿もやがて転送ポートから発する光に包まれ、なのはに続き現地へと飛んでいくのであった……。

〈Episode 15…まさかの独断行動なの!〉(後書き)

はい、という訳で一ヶ月ぶりの更新となりました。comaです。

とりあえず、一言。

前回の次回予告とは違うサブタイとなってしまう、申し訳ありません!

その、言い訳というか、弁解をさせてもらうとですね…。

何か執筆している内に気付いたら文字数が…：みたいなことになりまして…orz

全国の皆様、計画性がない人間でごめんなさい(涙

まさかのクロノくんの執務官としての威厳が…orz

執筆終わって読み直したとき、これだと執務官なのに取り乱しすぎじゃね?と思ったのですが…。

書き直す気力がなくて、そのまま押し通してしまいました(汗

おまけにそれぞれのキャラの台詞が原作とはかなり違うものを書いたなあと思いました。ちよっとなのはさんのキャラが崩れたかも、と心配(汗

あと、オリキャラとして登場させてるサクラくん…：自分で執筆してて、これは読み手に嫌われるタイプの男子キャラかもな〜と、漠然と思ったり。

賢い男子キャラって言うてることとか、考えてることとか、全部理知的になっちゃうんですよね…。何でだろ…?

で、ですね。そろそろ模試と中間考査なるものが迫ってきておりま

して…。

次の更新はかなり間が空く可能性があります。

まあ元々計画性がないので、言ってるとおりになるかどうかは不明ですが…。

とりあえず、次回予告をどうぞ。

くなのは>

アースラを飛び出した私たち。向かった先で対峙するのは<ジュエルシード>を取り込んだ大きな六つの竜巻。

でも大丈夫！皆で力を合わせれば絶対に何とかできるよね！！

そして、その中で私があなたに伝えたい言葉がきつと見つかるはず。

次回、魔法少女リリカルなのは<Prologue>

『Episode 16…あなたに伝える言葉なの』

リリカルマジカル、頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0788i/>

---

魔法少女リリカルなのは ～Prologue～

2010年11月19日17時05分発行